

届かぬ鎖



第一次世界大戦、ロシア革命、内戦

ボリシェビキ、帝政派、無政府主義者、コサック、チェコスロヴァキア軍団、少数民族etc.。ありとあらゆる勢力が主権を主張し出したシベリア・ロシア極東！ 全ての秩序、倫理が崩壊した中に、日米英仏が正義を掲げて出兵。混沌の中、出会った男女に芽生えたものは、果たして真実の愛なのか？

テロルの嵐吹き荒れるシベリア！

ドスン、と地面が沈み込む感覚。

敷石の間から土煙がパパッと噴き出す。

一瞬後に上空からガラスが降ってきて、澄んだ音とともに石畳にぶちまけられる。上を見上げれば、鉄格子がひしゃげて窓から落ちそうだ。テラスの天井には、部屋の内部でちろちろ動く炎の照り返しも見て取れる。

その建物からわらわらと走り出てくる人々の中に、細身で金髪、ぱりっとした一とはいっても埃まみれの一背広姿の背の高い青年がいた。

彼がかぼうのように肩を抱きかかえて一緒に出て来た老婦人は、額の辺りから血を流している。

「糞どもが！ 強硬手段に出やがった！」

彼は思わず英語で悪態を吐き、歯をギリギリ噛みしめて今出て来た建物の上の方を見上げている。

早くも物見高い人たちが集まり始めている。

くたびれた軍服姿のチェコ人あり、プラトクで頭を被ったロシアのおばさんあり、上半身裸の荷揚げ人夫風の屈強な男あり、和服に日本髪を結った女あり……。

顔つきも彫りの深いのから平たいの、髪の色も金髪、赤毛、黒髪、灰色、茶色その他色とりどりの頭をした雑多な連中が、ありとあらゆる言葉で怒鳴り合っている。

顔を血で染めた老婦人は、青年にしっかり支えられながら必死に夫の名を呼んでいた。

「レフ……レフ！」

「ここだ、エーヴァ……」

建物の中から声がした。

膨らんだ書類カバンを抱え、白髪の老人が建物からよろよろと出て来た。

ふさふさした白髪はやや乱れ気味、足取りは若干おぼつかなかったが、特に怪我はしていないようだった。

そればかりか、眉間に深い縦皺を寄せ、丸い眼鏡の底から鋭い眼光でじろりと周囲を見回す様は闘志満々、どんな脅しにも屈しない強固な意志をありありと表している。

「……怪我は？」

彼は妻の怪我に気付き、そして初めて書類カバンを足元に置いて血で額に貼りついた彼女の髪をベリベリと剥がした。派手に出血しているが、大きな怪我ではなさそうな事を見て取り、彼は胸をなで下ろしている。青年から彼女を引き取って、ハンカチで血を吸い取ってやる間も、

「レフ……あなた、どこにいらっしゃるの？」

と老婦人は不安そう。彼……レフ・カミンスキーは彼女の手をとって自分の頬に引き寄せた。時折咳き込みながらも、

「わしは……何ともない」

と、その手に口づけをした。

それから、強張った表情で野次馬たちが怪しい動きをしまいかと観察している青年と顔を見合わせた。

「……ボリシェビキのヤツら、随分と思い切ったことをする。ウラル山脈の向こうならともかく、ここは極東だ。しかも、連合国が目を光らせているウラジオストクの街中だ。そんなにしてまでわしを消したいのか？」

それは当然でしょう、とでも言うように青年は憮然とした表情で肩をすくめる。

「だが……」

ヤツらの企みを挫いてやった、してやったり、という気持ち。紙一重で生き延びたという危うさ……。それらが胃の中で混じり合い、咽頭で笑いとなってほとばしり出た。

カミンスキーは笑った。

事情など知らない野次馬なら恐怖のあまり狂ったか、と思ったに違いない。現に眉を寄せてひそひそ話し合っている者も結構いた。確かに、こう何度も繰り返すカミンスキーの姿には狂気を感じられたことだろう。

「ヤツらは失敗したのだ。わしはこうして生きている！　そう簡単に消されてたまるか！！　わしは生きているぞ！！！」

丘の斜面にぽっかりあいた空き地。

明るい林の中、丘の麓までの草地に緩やかにうねりながら道が付いている。中腹に建っている家まで上る人や馬が踏みつけて自然にできた道だ。林は海までカーテンをかき分けたように放射状に開けているから、屋敷からは訪ねてくる人が最初から見える。

だから、安藤が道なりに黙々と登っていく様子を住人は早くから観察していたのだろう。

安藤がようやく玄関に辿り着いて呼び鈴を鳴らす前に、細身の金髪の青年がすっ飛んできた。

「止まれ！ 身分証明証を提示しなさい」

流暢だがクセのあるロシア語で言った。

「じゃあこれで……日本国の海軍の者です。新しくここの担当になりましたので、ご挨拶にと思ひまして。カミンスキーさんと今会えますでしょうか」

喉がからからに渴いて素っ頓狂な声が出た。その声が耳に入って焦ったせいか、どっと汗が噴き出る。

安藤は焦りに焦って名刺を取り落とした。金髪の青年は安藤を見据えたまま腰を屈め、名刺を拾い上げた。胸元にちらりと拳銃の銃把（グリップ）が見えた。

「アンドー……クラタさんね。……どっちが名前？」

「庫太（くらた）が名前です。安藤とお呼びください」

「では、ガスパジン・アンドー（安藤さん）」

青年は安藤を敬称付きで呼び、丁寧な口調で話し始めた。

しかし、内容は不躰とも言える程に率直な不満だった。

「……日本の方にしてはきれいなロシア語をお話しになる。カミンスキー氏はひどくご立腹だ。日本の海軍は、『ウラジオストクの民衆を護る』と言って陸戦隊を上陸させながら、ウラジオストクの状況をまるで掌握していない。だから、2週間前のポリシェビキの襲撃のようなことが起こるんだ、とね。その後の対応もまったくくなっていない。現に君がここにこうして来るまで、2週間も放ったらかしにしてるじゃないか」

欧米人に対してははっきり言わなきゃ、と安藤は体の芯に震えを感じながらも思った。

息を大きく吸って、同じくらい率直に思った事を吐き出した。単語の一つ一つ、子音の一つ一つをはっきり意識して発音しながら。

「カミンスキーさんにはご自分の立場がよくわかっておられないようですね。それに、2週間前の事件。あの事件の犯人はまだわかっていませんよ。なぜポリシェビキの仕業と決めつけるのです？ カミンスキーさんには、ロシアの内にも外にもありとあらゆる敵がいるじゃありませんか。とにかく僕は、カミンスキーさんに会いに来ただけだ」

これじゃ喧嘩腰だ、と安藤は言ってしまってから心配したが、そんな心配は全く無用だった。青年はニヤニヤと笑みを浮かべ、

「気に障ったかい？」

と、誰何するような口調は薄まっていた。彼は肩をすくめて言った。

「いや、こっちもね、あの事件以来ピリピリしているもんでね。意地悪しようってつもりじゃないんだ。カミンスキー氏だって日本の海軍が手を尽くし、この家を手配し、夜間の警備に兵員を割いてくれている事には感謝している。でも、正直言ってオレは怖い。あんな昼日中、チェコの兵隊がうようよいる中で襲撃されたんだぜ？　ポリシェビキというのはそういう蛇のように執念深く、鼠のようにどこにでも潜り込んでくる連中なんだ。だから、どんな小さな穴でも警備上の穴が気になってしょうがないのさ」

しばしの沈黙。

彼の言う不安は、誠にもっともな事である。

ふと、青年はある事に気付いたようだ。

「あ、そっか。言い忘れてた。オレはフレデリック・ルイ・チエール。よろしく、安藤さん」と、右手をさしだした。

「よ……よろしく」

この人が件の米国（アメリカ）人、フレデリックだったのか。想像していたのと違う、と安藤は戸惑いながらも右手を出して握手した。

で、中に招じ入れられた。

暗い玄関の中にはまた扉。冬の酷寒を防ぐための工夫で、冬ならここで雪をはたき落とすところだ。今は壁に麦わら帽子が引っ掛けられているだけだ。もう一つの扉を開けるフレデリックに導かれてながら、安藤は心に思ったまま尋ねてみた。

「チエールさん。あなたはカミンスキーさんの秘書だと聞いていましたが？」

フレデリックは少々芝居がかった動作でくるりと振り返り、

「そうだよ。でも、ボディガードでもある。いざって時は、誰もが戦うつもりなのさ、カミンスキー夫人……エヴェリーナ婆さんでさえ！」

ちょうどその時。庭先から年配の女性の声がした。

「キャサリン……カーチャ！　ちょっと来て！」

「はあい！　ちょっと待ってくださあい！」

華やいだ若い声が家の奥から答えた。

と同時にタッタッと軽い足音をさせて小柄な若い女が家の奥から駆け出してきた。

小柄な、と見えたのは体のツクリが全体的に細いからであって、彼女が安藤の横をすり抜けたとき、彼女の顔は安藤の頭の上を通り過ぎていた。猫の毛のように細い柔い金髪が、安藤の頬をさらりとかすめた。

彼女は玄関に掛けてあった麦わら帽子を引っ掴むと、外に飛び出した。

安藤は思ってもみない闖入者に、どういう反応をしたらいいのかわからない。

「……あれは？」

と、訊くまでに変な間ができてしまった。が、

「あれがエヴェリーナ・カミンスカヤだ」

というフレデリックの答えに対しては、即座に問い返した。

「いや、今横を通って行った若い娘……」

フレデリックはわかってる、わかってる、というように頷き、ニヤニヤしながら安藤の肩ををぼんぼんと叩いてきた。

「そうだろう、そうだろう。オレの妹のキャサリンって言うんだ。君も可愛いと思うだろ？ でも駄目だぜ。キャサリンにはもう恋人がいるんだ。そのうち、厭でも会うようになるだろう。まだつきあい始めて10日も経っていないのに、キャサリンときたら全くぞっこんなんだから。素朴で気の良い青年でな。ただ素朴な分、自分たちの国を良くしていこう等々の志もまるでない所が欠点かな」

フレデリックの話を聞く間、安藤は何か説明のできない胸騒ぎを感じていた。

「10日前……10日前ね……」

おそらく「何か」引っかかるモノを感じたのはそこだ。安藤は思わず知らず眉間に皺を寄せて考え込んだが、フレデリックはそういう不安は感じていないようだ。

「余計な話でしたかな？ カミンスキー氏の所へ案内しよう」

フレデリックは肩をすくめて話題を転換した。安藤は見過ごすことができずに忠告した。

「そいつには気をつけた方が良い。どこの誰か知っているのですか？」

しかし、フレデリックには安藤の漠とした不安感は理解してもらえなかったようだ。

「おやおや。焼き餅ですかね……」

と下世話な話と受け取ったのは、自分の身近な人間過ぎて彼にとってはカミンスキーの件とは別件と感じられているのかもしれない。

「ネルグイって名ですよ」

「ロシア人ですか？」

得体の知れない相手に安藤は警戒心を剥き出しにして尋ねた。

「いやいや、心配ご無用。ボリシェビキの一派じゃないさ。中国東北部から来たバルグートだと言っていたよ」

「バルグート？」

安藤にはそれが民族を指すのか、なんらかの政治的団体を指すのか（たとえば「ボリシェビキ」のような）、さっぱりわからなかった。

「なんでも、モンゴルの一部族だそうだ」

「モンゴル……？」

安藤はモンゴル→蒙古と頭の中で変換しながら問い返した。

「成吉思汗（ジンギス・カン）のモンゴルですか？」

「ジンギス・カンとは古い所を来たな。まあそうなんだろうが、今はラマ教（チベット密教）に毒気を抜かれた腑抜け連中さ。内蒙古のことは君の方が詳しいかと思ったが、そうでもないんだな」

フレデリックは少々当てこするような調子で言った。

「とにかく。気をつけた方が良いつて話ですよ」

安藤がムツとしているのを見てフレデリックはおもしろがり、茶化すように言った。

「はいはい。ウラジオストクの守護天使・日本海軍の方針に従います！で、カミンスキー氏に会うのか会わないのか。どっちにするんだ？」

フレデリックに指摘されて安藤も最も大切な用事を思い出し、慌てて言った。

「会います！ 会います！」

叱りつけるような怒鳴り声を聞きつけたキャサリンが慌てて飛び出すと、白い尻に黒いブチの入った小柄な馬が明るい林の縁で下草をブチブチ噛み千切って食べていた。

「ネルグイ。ここには来ないでって言ったのに……」

キャサリンが馬に向かって声を掛けると、馬は耳をくるりと回しつつ長い鼻面を草の中からひょいと上げた。縮れた黒いたてがみの下から大きな瞳でキャサリンをちらりと見やった。

「んん……じっとしてられなくて」

そう言って、馬の足元で馬と同じくらいもしゃもしゃの髪をした若者が両手をついて上半身を起こした。

それから草の中で胡座をかいて欠伸をしているものだから、キャサリンはその背後から覆い被さるように抱きついた。

「僕だって君の役に立ちたいよ。そりゃあ田舎者の僕には、世界大戦とか革命とか遠い世界のことにはしか思えないけど。でも、君の信じているもののために僕も働かせてくれよ」

彼は頬を寄せてきたキャサリンの耳元で言った。

「でもね、中には入れないのよ、あなたは。日本軍の許可がない限り」

「うん。番兵に何か言われて怒られた。銃を突きつけてきたんでしかたなく君が出てくるまで待つことにしたんだけど。それでも僕に銃を向けてじっと睨んでるんだ」

ネルグイが視線で指し示す方向を見やると、なるほど、銃口を下に向けてはいるものの、警備兵が口をへの字に引き結び、顎が真っ赤になるくらい力を入れてこちらを凝視している。

人目がある事に気付いてキャサリンはネルグイの前、草の上に腰を下ろした。ネルグイはキャサリンの両手を取って軽く振りながら言う。

「随分すごい警備だねえ。まるで要塞だ。……そのう……誰って言ったっけ？ 匿われている人の名前？」

「レフ・カミンスキーよ」

「レフカミン……スキー？」

「そこで区切らない。レフが名前でカミンスキーが名字よ」

「名字って？ 氏族とか部族の名前とは違うの？」

「そうね。似たようなものではあるけれども。昔はロシアでも誰でも自分は部族・氏族に属しているって意識があったけれども、今は家族が社会の基本になってるから、家族ごとに名前ができたのよね」

「じゃあさ、名前で呼んでもいいかな。レフなら覚えやすくっていい名前だ」

確かに。ロシア人の名前はアメリカ人にとっても長くて覚えにくい面があるので、ネルグイの正直な感想に思わず笑みがこぼれる。

「そうね。でも、カミンスキーさんはみんなに尊敬される先生だから、尊敬を込めて呼びたいじゃない？ 名前だけだとお友達みたいになっちゃうから、名前で呼ぶんだったらレフ・ダヴィドヴィチと呼ぶべきだわ」

「うう……長すぎる」

キャサリンは頭を抱えるネルグイを可愛いと感じて声を上げて笑ってしまった。実際はネルグイの方が5歳程年上のようなのだが。キャサリンは傍らでずっと口をもぐもぐさせている馬の頬に手を伸ばして言った。

「ネルグイ、ねえ、ちょっと走らない？ 私をこのおちびちゃんに乗せてちょうだい」

「いいけど。でも勝手に遊びに行っちゃっていいのかい？ 君のお兄さんは心配するんじゃないのかい？ 可愛い妹がポリシェビキにでも誘拐されたんじゃないかって」

「あはは。そう言われたら、馬賊に拐かされてたって言うわ」

「そりゃあひどいよ。僕は盗賊やら泥棒の仲間じゃない……」

自分の軽口にネルグイが本気で困っているのを見て、正直すぎるくらい正直な人なんだなあ、とキャサリンは思う。そう思うとなおさら弟のように思えて愛おしくてしょうがなくなるのだ。

ここでぎゅっと抱きしめたいところなのだが、こちらをじっと見ている目もあることなので、キャサリンはネルグイの髪代わりに馬のたてがみを撫でた。馬は大人しくしている。

そこでキャサリンは馬の背にさっさとまたがった。

「さ、行きましょう！」

と手を差し伸べると、ネルグイも笑顔になって立ち上がった。そして、キャサリンの後ろにまたがった。

「ええー？ 二人も乗って大丈夫？」

ネルグイの馬はポニーと呼ぶのさえ躊躇われるくらい小さいのだ。四肢はがっしりとしていていかにも馬力がありそうではあるのだが。

ネルグイの方を振り返って、本当に馬の背が折れてしまわないかと聞こうとして、キャサリンはどきりとして口をつぐんだ。

「ああ、平気平気。君なんか鳥の羽毛がひらりと一枚くっついたようなもんだ」

と、言いながらキャサリンの肩に顎を乗せるようにして顔を突き出してきたからだ。彼はキャサリンとそんなに身長も変わらない……というか1、2cm低いようなので、こうしないと前が見えないのだろう。

キャサリンが全身の筋肉を緊張させているのに気付いて、ネルグイは頬がくっつくくらい首を曲げてキャサリンをのぞき込む。

「怖くなった？」

「い、いいえ。……あっ」

ネルグイが座った位置をずらして体をぴったり寄せてきたので、キャサリンはびくりと身を縮めた。

「大丈夫だよ。ゆっくり走らせるから。ホラ手綱を持って」

言われるままに革紐を握ったキャサリンの手を包み込むようにして手綱を取ると、ネルグイは馬を出発させた。

カラッと晴れあがって雲一つない空。

風は吹いていたが、じわじわと汗ばむ暑さ。手の汗で革の手綱が湿って千切れるかと思える程だった。背中の方はネルグイの呼吸や筋肉の動きが直に感じられて暑さを感じるどころではなかった。

それでも、しばらく行くと幾分緊張も解れてきた。

「どんなことをしても馬は思うままに操れるのね」

キャサリンは話を振ってみた。

「操っているんじゃない。馬のやることに合わせていってるだけさ」

ネルグイは簡単に頷く。

「それだけじゃないと思う。だって、初めて会ったときのこと。あんなに暴れてる馬をあっという間に手懐けちゃうんだもの。他の誰も、飼い主でさえ手を付けられない程暴れてる馬を」

「あの時は危なかったね。君が怪我をしなくて良かったよ」

ネルグイの返事は素っ気ない。自慢しても良い事さえ自慢げには話さない。まあ、そこが良い所でもあるが、もっともつこの人のことが知りたい、と思うときには……つまり、今がその時な訳だが、もどかしくてならない。

「あなたってば自分の事はあまりしゃべらないんだもの。もっとあなたのことを知りたいわ」

「僕もだよ」

と笑顔で言ってからなぜか少し黙り込み、ため息のようにつぶやいた。

「……でも……。知らないでいた方が良い事もあるかも」

安藤の実家はウラジオストク市内で店を営んでいる。

安藤が家に帰って夕食をとっていると、ひょっこりと以前から安藤家に出入りしているコサック崩れのフェージャおじさんが店先に顔を出した。晩飯目当てなのが厚かましい程にあからさまだ。でも、まあ、いつものことだ。今帰宅した家族、のような自然さで飯は盛られる。おかずはたいした物もないわけだが。

いかつい体躯で髭面のフェージャおじさんが刺青の入った太い指で箸を持つと、まるで爪楊枝のようで滑稽と言えば滑稽なのだが、子供の頃から見慣れたごく普通の光景ではある。

安藤はちょうど良いところに来たとばかりに訊いてみた。

「フェージャおじさん、バルグートって知ってる？」

「坊……」

と、彼はいい加減大人になった安藤のことをいまだに小さな子供のように呼ぶ。先っぽの反り返った口ひげに米粒を乗つけたまま頷いた。

「知ってますぜ。……モンゴルの部族でやしょ？」

「そうらしいね」

と、安藤が頷く間にコップいっぱいのお茶を飲み込んで口の中を空にすると、猛烈な勢いで話し出した。

「獯猛な連中だって評判でさあ。セミヨーノフも自分のコサック軍に引き入れようと呼びかけたらしいですぜ。先の辛亥革命の混乱に乗じて勝手に独立を宣言した外モンゴルの軍を率いていたダムディンスレンという族長がバルグートだそうで。なんでも、生け捕りにした漢人捕虜の胸を生きたまま切り裂いて動いている心臓から噴き出す生き血を軍旗に捧げたとか」

その話は安藤も聞いたことがあった。それでようやくピンと来た。

「あ……ああ、バルグートってこっちで言うバルガのことか。内蒙古の東の端の方にいる未開で野蛮な部族だろ？」

馬賊、匪賊の類ではないか、と安藤は思った。安藤にとってはどの国にも属さない人間なんて考えも及ばない存在なのだ。日本なら、たとえアウトローの任侠の徒であっても日本人、日本国に属しているという意識はあるはずだからだ。

しかし、フェージャおじさんの認識はちょっと違うようだ。

「ははっ。軍隊はそれくらいの元気があった方が頼りがいがあるってもんでさあ」

捕虜を虐待するのは国際法で禁止されてるだろ、と安藤は眉を顰める。

そんな安藤の表情を見て、フェージャおじさんは重ねて言う。

「やつらにとっちゃ、漢人なんざ盗人でしょうからな。土地を奪い、国を奪った憎い相手だ。制裁を受けて当然でさあ」

「それにしたって、私刑（リンチ）だろ。皆が自分の法（ルール）で好き勝手にやれば世の中、滅茶苦茶になってしまう」

「ははっ。今のロシアにも中国にも法なんてありゃしません。力のある者だけが己の身を守れる。そういうシンプルな掟があるだけでさあ」

坊は真面目だなあ、とフェージャおじさんは笑う。真面目とかそういうレベルの問題じゃないだろ、と安藤はあきれた。フェージャおじさんは独立不羈の精神を持つコサックの出とはいえ、コサックだってロシア皇帝に忠誠を誓っていたのではないか？

「そういえば、坊。モンゴルといやあバルグートじゃないがおもしろい話を聞いたことがありますぜ。ドイツとの戦争で、日本人部隊がロシア軍に加わってドイツ軍と戦っていたって言うんでさあ」

フェージャおじさんは良い事を思いついたとばかりに身を乗り出して話し出した。

もちろん日本とロシアは同盟国だからあっても良い話ではあるが、日本軍がヨーロッパまで部隊を送り込んだことはない。ロシア領内でさえ、今回の海軍陸戦隊がウラジオストクに上陸したのが初めてなのだ。

「どうせ根も葉もない戦場の与太話だろ？」

安藤が全く信じていなそうなのを見て、フェージャおじさんは唇から米粒をポロポロこぼしながら力説し出す。

「それが、またおもしろい話なんです。もちろん日本人じゃありゃあせんで。ロシア皇帝に仕えていたモンゴルのブリヤートという部族の部隊だったってのが噂の真相だったって事さあ。坊はブリヤートの人間と会ったことがありますかね？ いやいや本当のところ、日本人と見分けが付きませんぜ。で、日本がヨーロッパ戦線に部隊を送り込んでいる流言が飛んだって訳さあ」

「欧米人から見たら、日本人も中国人もモンゴル人も同じだろ？」

フェージャおじさんは大袈裟に言っているんだろう、と安藤は話半分に聞いている。

「坊。あっしが一番言いたいのはそこじゃないんで。ブリヤートなんかは顕著ですけど、モンゴルだ、アジア人だ、といってもロシア人と変わらないって事なんでさあ。つまり、皇帝派もいりゃあ、ボリシェビキもいる。モンゴルだから日本の敵だ、味方だって決めつけるのは危ないですぜ」

フェージャおじさんの話を真剣に聞き入っていた安藤に、父が唐突に言った。

「こういう状況なので、ウチも内地に引き揚げようと考えている」

「うん。いいんじゃないかな」

日露戦争時、ウラジオストクの日本人は全員日本に避難した経験がある。戦後すぐに戻ってきて今の状態があるわけなので、これから何が起こるかわからない状態のウラジオストクから退避するのは、大変だけれども安全第一に考えればあり得る選択だと思い、安藤は食事の手を止めずに頷いた。

「いや、ここを引き払って北海道へ帰ろうって話だよ」

言葉足らずの父の話を引き取って母が言った。

「え」

さすがに安藤は手を止めて母の顔を見た。

安藤の生まれは北海道だが、赤ん坊の頃に家族共々ウラジオストクに移住してきているので、ウラジオストクが故郷のようなものだ。そこを引き払うとなると家族の大事件だ。

「日露戦争の時みたいに、落ち着いたら帰ってきたらいいんじゃないの？ いろいろな国の軍隊が入ってくればごたごたするだろうけど、それも一時的なことだよ。そこまで深刻に考えなくたっていいんじゃない？」

「いや、今回は何か違う。あたしは厭な予感がするんだよ」

母は言う。

「たかが予感で……」

そんな家族の将来にもかかわるような重大な決定をするのかと安藤は言葉を失った。

「たかが？ 女の勘を舐めてもらっちゃ困るね。商売ってのは損失が出たときにすぐさま手を引くかも少し踏ん張るかの見極めが肝心さ。損を取り返そうと思って見込みのない事業にズルズル巻き込まれていくのが一番まずい。傷が大きくならないうちに引くのが肝心だが、それにはなかなか勇気が要る。そういうときは偉い人の言うことや占いまで、他の誰かを当てにしたくなるもんだが、長年商売をしてきた自分の勘ってヤツが一番当たったりするものさ」

「そりゃそうだろうけどさ……」

家を、故郷を捨てる決断が勘だなんて。

安藤が納得しそうなないので、母はもう少し「女の勘」の中身を説明しだした。

「庫太、おまえも見ただろ？ 日本の海軍の船をさ。戦艦石見。あれは元々ロシアの軍艦さ。日露戦争の分捕り品のオリョール号さね。あれを見て、ロシアの人たちがいい気がすると思うかい？ 日本の軍人さんたち、少々奢っているんじゃないかね？ そういう時は碌な事がない。厭な予感とは、そういうことさ」

「いや、奢ってるなんてそんな事はないよ！」

と、安藤はムキになって食って掛かったが、

「まあ、また平和になったらまたこっちに店を出すって事もあり得る」

と、父がボソボソと言ったので、無理に押し止めることもあるまいと、それ以上の反論はしなかった。

高緯度地方の夏の日はず長い。

とはいえ、そのピークは夏至の頃、六月だから、八月に入ると急速に日没が早くなってきており、キャサリンはうっかりその時刻を読み誤ってしまった。ウラジオストク辺りだと白夜になるほどの日長にはならないのだ。

急いで帰ると、戸口には既にフレデリックが待ち構えていた。

「遅かったじゃないか。ポリシェビキにでも誘拐されたんじゃないかと心配したんだぞ」

「モンゴル独立運動の闘士と会ってたのよ」

と、キャサリンは自分自身の後ろめたさを冗談めかす事で誤魔化した。

「モンゴル……？ ああ、ネルグイか。おまえも18歳の大人の女だ。誰とつきあおうと朝帰りしようとして自分で責任を持てば構わないが、前もって言ってもらわないと。あと5分遅かったらやっこさん、捜索隊を出す所だったぜ」

フレデリックは監視役がいるであろう家の奥を目顔で示して言った。

「兄妹（きょうだい）なんだからそれくらい察してよ……」

と、フレデリックに半分責任を擦り付けながらも、そういえば、フレデリックよりもっと面倒な人がいるんだって、と気が重くなった。

「……あの人、まだいるの？ いつまでいる気なのかしら？ アンドレイとか言ってたわね？」

キャサリンは声を潜めた。フレデリックも声を潜めた。

「安藤だ。ガスパジン・アンドーはここにいるのがお仕事ですってよ」

そうこうしている間に、気配に気付いた安藤が足音を荒らげてやって来た。

「チエールさん。いったい何事ですか？」

「オレ？」

フレデリックがわざとおどけて言ったが、それがまた安藤の怒りに油を注いでしまったようだ。冗談の通じない男なのだ。

「キャサリンさんに言っているんです！！！」

噛みつくように言ってフレデリックを押し退けた。

「……最近、態度がでかいんだよなあ」

ぶつぶつ言いながらも、フレデリックはひとまず引き下がる。

キャサリンは素直に謝った。

「ごめんなさい。ネルグイに久しぶりに会ったものだから……」

「ネルグイ……。例のバルグートですね。そもそもそのネルグイなる人物がどういう人間かもわからないのに、不用意に親しくするのは感心しませんね」

母親が小さい子供を叱りつけるような安藤の一方的な言い方にキャサリンは自分が悪いとわかっていながらもカチンと来た。大人げないことはわかっていたが言い返した。

「私が誰と会おうと自由でしょ。あなたに何の権利があってそんな事を言うのです？」

「あなたは、軽々しく外部の人間と接触すべきではありません。ご自分の立場をよく考えてくだ

さい。カミンスキーさんが常に狡猾極まりない連中に狙われているって事を忘れないで欲しいですね」

キャサリンが言ったことに対して安藤は倍にして小言を返してくる。日本人が無口で控えめだなんて絶対嘘、とキャサリンはムシャクシャしてきた。

「立場立場って、あなたの大事なのはご自分の立場でしょ？ 面倒に巻き込まれるのが厭でそういう事を言うんだわ」

「当たり前じゃありませんか。私はカミンスキーさんの安全を護らなきゃならない立場なんです。わずかの危険も見逃すわけにはいきません」

「ネルグイが危険だと言うんですかっ!？」

キャサリンが安藤の肩をどんと突いたので、安藤は見る間に耳まで赤くなった。

歯がみして怒りに震える安藤の形相に、これは拳銃を抜きかねない、と咄嗟にフレデリックが間に割り込んで二人を引き離した。

「いやあ、まったく野暮だよな。恋人同士を引き裂いちまうなんてさ！」

「ルイ兄さんは黙ってて！」

「そもそもあなたがちゃんと監督していないから悪いんだ！」

双方から迫られて、フレデリックは両手を挙げて大袈裟な身振りで天を仰ぐ。

そして節を付けて芝居がかった台詞回しで叫んだ。

「おお、許せ、許せよ、皆の者！ 全ては余の責任じゃ！」

さすがにこれには二人とも毒気を抜かれた。安藤は咳払いして一步退いた。そんなにムキになる事はなかった、とキャサリンも反省した。はいはいとってやり過ぎしておけば良かった。

それでも、今後ネルグイに会う度に厭味を言われるのも癪に障る。キャサリンは安藤に提案してみた。

「安藤さん。一度ネルグイに会ってみますか？ 私たちにやましい事はないんですから。もしそれであなたの気が済むなら、ネルグイにそう頼んでみますけど」

「なるほど。それなら彼をどんな人物を見極める事ができますね。これは楽しみだ」

少々皮肉っぽい言い方にまたもやカチンと来たが、キャサリンは深呼吸して気持ちを落ち着かせた。

一度会えば、職務上過剰に疑り深くなっている安藤でも、ネルグイが人の良い素朴なだけの青年だとわかってくれるに違いない。

借りてきた猫のよう、というたとえがあるが、飼い猫ならもう少し人慣れしていようというもの。

着飾った紳士淑女が優雅にワインをたしなんで談笑しているレストランに放り込まれて、ネルグイは恨めしそうに安藤を睨んでいる。

ネルグイはモンゴル系バルガの出身とはいえ、短く切った髪を七三に分け、シャツにズボンという洋装だから、内地の人がイメージするようなモンゴル人らしくはない。

もっとも、モンゴル人が20世紀・大正のこの時代になっても弁髪を結っているといつて笑うのはお門違い。

さすがに今、日本でちょんまげの男はいないが、女は日本髪、和装が大勢である。御維新後の断髪令だって抵抗を感じた者は相当数いたはずだ。お上の指導がなければ、日本だって江戸時代のままのちょんまげ姿だったかもしれないのである。

そうは言っても、ウラジオストクで「レストラン」といったら年に何回かおめかしして行くような所である。普段着の安藤ら一行はちょっと浮いている。ネルグイは精一杯の正装としてキャサリンの指示で川に行って体を洗い髪を洗って、キャサリンの見立てた服を着てきたらしい。

そのキャサリンは今もネルグイの隣に座って緊張をほぐそうとしきりに話し掛けているが、ネルグイの方は身を固くしたままだ。安藤が品定めするかのように一挙手一投足まで観察しているから、というのもあるだろう。

緊張して縮こまっているから小さく見えるが、さっきキャサリンと一緒に入ってきたとき見た所では、背はキャサリンと同じくらい。日に焼けた褐色の肌と毛先の赤い潮焼けしたような髪から港湾労働者風ではあるが、肩や胸の筋肉は彼ら程発達してはおらず、かといって痩せているわけではなくごくありふれた体格の男である。歳は20代半ばという。黒いくりくりとした瞳に長い睫毛が掛かり、ふっくらした頬は博多人形のようにきめ細かい事から、髭を生やしていないことも相まって年よりかなり若く見える。

それでも手を見れば、力仕事で鍛えられた大人の男の手であり、子供っぽいとは思われない。

安藤がいつまでもじろじろ見るばかりなので、堪えきれなくなったのかネルグイが話を切り出した。

「……それで、僕に何を訊きたいのです……」

一時も早くここから逃れたいと思っているのだろうか、ものすごい早口のロシア語である。

彼がロシア語を話すというのはキャサリンから聞いていたが、やはり、中国出身のモンゴル人がロシア語を話すというのは不思議と言えば不思議なので、その辺りから探ってみるかと思安藤は思った。

「ロシア語お上手ですね。どこで習われました？」

褒め言葉も馬鹿丁寧だと厭味にしか聞こえまい。ネルグイはその事は聞かれると予想していた

のか、想定問答集を読み上げるようになかったりした答えを返してきた。

「最初は故郷のホロンバイルに商売に来ていたロシア人から習いました。後はこちらに来てから周りの人から教わりました」

「ウラジオストクにですか？ ウラジオストクでは何をしていますか？」

「何をって、仕事ですよ。ホロンバイルでは中国人やロシア人が森や草原を切り開いて畑を作るようになって、馬も飼えないし、毛皮獣もいなくなりましたので……」

「こちらでは何のお仕事を？」

「運送業……というんですか。馬車馬の世話をしていますよ」

「いつからですか？」

「一年くらい前からでしょうか」

「一年ですか……ロシア語お上手ですよ」

安藤はネルグイの表情を凝視しながら繰り返した。

それがいかにも「おまえの言っているのは嘘だろう」と暗に言っているように感じられたらしく、キャサリンがたまりかねて口を挟んだ。

「極東・シベリアには独自の言葉を話す少数民族が何十といます。こういう人たちは、生活上の必要から子供の頃からいくつもの言葉を覚えるし、ロシア語や中国語などの新しい言葉もすぐ習得するものです」

「立会人は口出ししない！」

安藤は厳しい口調でぴしりと言った。それがキャサリンのくすぶっていた不満の火に油を注いだ。

「いいえ、しますよ！ あなたの質問の仕方はまるで警察の尋問です。ネルグイがいったい何の悪いことをしたって言うんです？」

「そういうつもりではありません。興味がわいたので聞いてみただけです」

もちろん、商家の安藤の家にはロシアに限らず中国からもいろいろな人たちが来ていたから、子供の頃から多言語の環境に接し、学校に行かなくとも幾つもの言葉を自由に操り、国境を自在に越えていく人たちがいるのは知っている。

ロシア語のことを執拗に聞くのは、なんというか、てこのようなものだ。話題は何でもよく、少しでも深く差し込んで揺さぶってみたかったのだ。その結果、ネルグイが自分でここまで言ってもいいと想定している以上の何かをこぼしはしないかと。まあ、それがキャサリンに言わせれば「警察の尋問」ということになるのだろうが……。

「いいんだ。僕は別に探られて困る秘密なんて持ってないんだから。彼の気の済むまで何でも答えるさ」

ネルグイは半分だけ振り返り、キャサリンの手の上に手を重ねて言った。

「でも……」

キャサリンはふくれっ面をして言いかけたものの、ネルグイに手をぎゅっと握られて口をつぐんだ。

「ホロンバイルでは、ロシア語がわかるとなると、子供でもロシアから来た商人との交渉事や、

ロシア人の農民とのもめ事に呼び出されて通訳させられたので故郷である程度はしゃべれました。ロシア語がしゃべれたので、仕事を探す時に中国でなくロシアを選んだ、と言った方がいいのかもしれない」

「なるほど」

跳ねっ返りのヤンキー娘が大人しくなったところで、安藤はすかさずネルグイに、故郷はホロンバイルのどこなのか？ 仕事探しと言ったってあてもなくふらりと来たわけではないだろう？

等々、矢継ぎ早に質問した。

ネルグイも場の雰囲気慣れてきたのか、キャサリンと手を繋いでいるからなのか、声のトーンは随分落ち着いてきている。首を縮めて肩に力が入っているのは相変わらずだが。

安藤がさてこれから本題に入るぞ、と気を引き締めているところに給仕がつかつかと歩み寄って来、

「安藤様、ちょっと」

と耳打ちした。

「……フレデリック・チエールと名乗る米国人が安藤様を出せと、英語でまくし立ててますけれども」

安藤にも聞こえるか聞こえないかの小声だったにもかかわらず、兄の名に敏感に反応してキャサリンが顔を上げた。

もちろん、フレデリックは今日のこの「お見合い」については知っている。しかし、なぜここに押しかけて来るのか。

「わかった」

と席を立ったものの、安藤には思い当たることが全くない。首を傾げながら給仕について行く。

戸口で待っていたのは間違いなくフレデリックであった。

安藤を認めるともの凄い勢いで突進してきた。

「ど……どうしたのです、この騒ぎは？」

安藤の問いなど無視していきなり腕を掴んできた。

「来てくれ！」

「何事です？ まだ……」

ネルグイとの話が終わってない、と言っている間にも、安藤の腕をつかんだまま、レストランの中にずかずかと入り込んだ。

そして中を見回し、気配に気付いたキャサリンが

「ルイ兄さん？」

と腰を浮かせたところを見つけて、よお！とあいている方の手を挙げて合図した。

「安藤は借りていく。あとは二人でごゆっくり！！！」

ぽかんと口を開けたままのキャサリンとネルグイを置き去りにして、フレデリックは安藤を引きずるようにして連れ出した。

レストランの外にはT型フォードが停めてある。

安藤は、あ、あのT型フォード動くんだ、とびっくりした。

カミンスキー邸の庭先に停めてあった車で、カミンスキーが時々磨いているのを見た事があるが、エンジンをかけたところすら見た事がない。コレクションのような物で実用性があるとは思っていなかった。

フレデリックはさっさと運転席に乗り込むと、早く早くと安藤を急かす。

人や馬車のごちゃごちゃと行き交うウラジオストク市街をあっという間に抜け出した。

アクセルを床までめいっぱい踏み込むフレデリックに、安藤は風に負けない大声で、「車の運転できたんですね？」

と、真っ先に訊いたのは、ちょっと意外に思ったからだった。

「デトロイトの出だぜ？物心の付いた頃から車には慣れ親しんでいるんだ。あのでかい鉄の機械を自分の思うとおりに動かしてみたい、と思うのが男の子ってもんだろ？」

フレデリックも大声で笑い飛ばした。

笑いが出るとはフレデリックの気持ちにも余裕が出て来たか、と肝心なことを訊いてみた。

「それで、いったい何が起こったんです？」

「それが……よくわからないんだよな」

急に表情を曇らせ、歯切れも悪く答える。

「よくわからないってどういう事です？」

「警備の日本兵たちが、突然ストライキを起こしたんだよ」

フレデリックはカミンスキーの秘書だから、共産主義者の語彙でそういう言い方をするのだろうが、ストライキというのはどういう状態なのか見当が付かない。現場にいたフレデリックがよくわからないのなら、話を聞いただけの安藤にはサッパリわからない事態だ。

「何か言いたいことがあるのかもしれないが、なにしろ言葉が通じないだろ？だから、君を呼びに来たんだよ」

フレデリックはハンドルを手の平でパシパシ叩いて肩をすくめた。

さて、カミンスキー邸に着いてみれば、フレデリックから聞いて想像していたよりはるかに緊迫した状況になっていた。

がっしりした体格のカミンスキーの護衛たちが建物の入り口を護り、それに対峙するかのよう二人の日本兵が詰めより、そのうちの一人が何やら大声でがなり立てているが、日本語だから通じてはいないだろう。

他の日本兵はまるで他人事。見世物を見物するかのような風情で座ったり寝転んだり好きな格好でなんとはなしに見守っている。

フレデリックが車を完全に停める前に安藤は飛び下りていた。

「小隊長殿、何があったのです?!」

と、声をかけると、抗議をしているように見えた日本人は振り返った。

「あ、安藤……」

と、なぜか気まずそうである。

彼に代わって、傍らで寝そべってニヤニヤしながらやりとりをながめていた年配の兵士がそのままの姿勢で言った。

「安藤さんよ、一つ聞くが。カミンスキーって過激派の一味だろ？」

「ペトログラード（現サンクトペテルブルグ。当時の呼び名）の労農政府の一味ではありませんよ。社会主義思想家で世界的に有名な大家だそうですが、労農政府のように政権奪取のためにはテロをも辞さない過激派（ボリシェビキ）とは一線を画す平和主義者だと聞いています」

「いや、要するに同じ穴の貉（ムジナ）だろ」

その年配の兵士は、安藤の答えを皆まで聞かずに言った。大雑把なくくりとしては、それも間違いではないのだろうが。

「何でオレたちが敵を匿ってやらにゃあならないんだ?って話なわけよ」

安藤にもうっすらと事情が飲み込めてきた。

共産主義・社会主義者と一口にいても、選挙と議会を通じて合法的に政権を取ろうとする勢力から、テロリストと言っても差し支えないような非合法な手段をも容認する勢力まで幅広い。

ロシアでは、それが路線によって細かく分裂してお互いに激しくいがみ合い、かと思えば次の日には共闘したりしている。

外から見たらほとんど理解は不可能……というより、当のロシア人でも正確に勢力分布図を把握している人はほとんどいないだろう、と思われるくらいの混沌とした状況だ。

帝政派＝味方、過激派（ボリシェビキ）＝敵、という単純な図式で捉えきれるものではないのである。

「人道上の理由から、と聞いています。上には我々にはわからない何らかの思惑があるのかもしれませんが、たとえそうでなくとも、私的な感情は抜きにして、誠実に命令を遂行するのが兵士

の勤めじゃないでしょうか」

安藤がしごく真っ当な答えを返すとどうもそれが気に入らないらしく、くつろいでいたように見えた連中がいっせいに立ち上がった。

「知ったような口をきくんじゃねえ、若造が！」

年齢からしておそらく、彼らは日露戦争にも従軍した予備役・後備役なのだろう。要するに歴戦の勇であり、安藤のような年齢からして戦闘経験なしと判断される若者からあれこれ指図されるのが気に入らないのだ。

それにしたって、

「落ち着け、お前たち……」

とおろおろする若い小隊長の言葉に全く耳を貸そうとしないのは問題ではなかろうか。

「あなた方にも意見があるのなら聞きましょう。改善すべき点があるのならみんなで改善していきましょう。今はとにかく持ち場に戻って、与えられた任務を遂行していただきたい」

しかし、安藤が何を言っても気に障るらしく、古参兵たちはじりじり間合いをつめてきた。

一人が仲間の無言の後押しを受けて、拳を振り上げて飛びかかって来た。

「おまえの指図なんて聞くか！」

安藤はわずかに拳を避けると同時に背負い投げに投げ飛ばした。髭面の古参兵は固い地面に腰を打ち付け、ぐうの音も上げずに伸びてしまった。

「うお……なんだ？」

「柔道やるのか、こいつ」

残りの連中は一瞬ざわついたが、さすが歴戦の勇、その程度で引き下がったりはしない。

「みんなでいっせいにかけ！」

と、今度は数人がかりで襲い掛かる。

最初の二、三人は体をかわし足を払って自らの勢いで勝手に転がるようにしたが、さすがに全員はいなしきれない。

腕をつかまれ羽交い締めになると、転がらせた連中が腹立ち紛れに腹や顔を殴りつける。

さすがにまずいのではないかとフレデリックが、

「安藤！」

と、助けに入ろうとした。安藤は首を絞められながらも声を振り絞って制止した。

「やめてください！ 手を出してはいけません！ 僕がやられてるだけならただの喧嘩です！ あなたがかかわったら国際問題になってしまう！」

「しかし……」

と、フレデリックがどうしたものかと戸惑う一方、安藤がロシア語をしゃべったことが兵士たちの神経を逆なでした。

「この露助かぶれが！」

「貴様は誰のために働いてるんだよ？」

などと悪態を吐きながら殴る蹴る。

その時だ。

日本兵の中に割って入る者がいた。ネルグイだ。

しゃにむに突進してきて安藤を締め付ける手を引き剥がし、安藤の正面に入って自分が盾になって兵士の拳からかばおうとする。

兵士たちは一瞬ひるんだが、ネルグイの首根っこを捕まえてつまみ出すと、拳を腹にたたき込んで難なく排除した。ネルグイはダンゴムシのように体を丸めて苦しんでいる。

登場すると同時に退場した助っ人の姿を認めて、安藤は驚くと同時に苦笑した。
弱いくせに何してるんだ、と。

それでも、ネルグイのおかげで少し間合いができた。まだまだ闘志を失っていない安藤が息を整え身構えた所で、上の方から声が降ってきた。

「こらあっ！ 何してるの！ 多勢に無勢で卑怯（アンフェア）でしょう！」

かんかんに怒ったキャサリンが、馬上から英語で叱りつけた。

それがまた、田舎のおっ母さんが悪ガキどもを叱るような口調であり、目線が高いこともあって、言葉のわからない日本兵たちもすっかり毒気を抜かれてしまった。

「あらあら、嬢ちゃんがお怒りだ」

「女に助けられるとは情けないやつめ」

などと悪態を吐いた。小隊長が、

「そ、そうだ。安藤にはオレから言うておくから、とにかく持ち場に戻れ」

と、自分の立場を取り繕うように言ったが、あまり聞いている様子はない。

キャサリンは腰に両手を当てて、彼らが持ち場に戻るまで、馬上からにらみ付けていた。

「大丈夫ですか、安藤さん」

と口の上では言いつつも、馬から下りてまず助けに行ったのはネルグイだ。

当然と言えば当然なのではあるが、何とも説明のできない感情に胸がざわめくのだった。

「申し訳ありません。僕の力が至らないばかりに……」

と、安藤はカミンスキーに深く頭を下げた。それはもう額が膝に付くかというくらいに。

結局、例の乱闘の後、カミンスキー邸の警備の人数は大幅に減らされることになった。

毎日二、三人が来るには来るが、もうほとんど形式だけである。

「いや、君が謝っても仕方ない。日本軍も本隊がウラジオストクに上陸したことだし、日本にとって傀儡政権を作る意味がなくなったのだろう。だから、私も要らなくなったというわけだ」カミンスキーはため息混じりに放り出すようななげやりな口調で言う。安藤もはっきり聞いた訳ではないし、聞けるような立場ではないが、カミンスキーには、海軍のさる筋からウラジオストク、ひいては極東・シベリアで反ポリシェビキ政権を組織してその首班に収まるようにとの働きかけがあったらしい。そのため、こういうシニカルな反応になったのだろう。

しかし、利用価値のあるときはいかにも恩を売るような態度、いらなくなったら手の平を返したような冷遇とは何という不義理。そんな信義に悖る姿勢を恥ずかしい事だと思い、安藤はますます頭を上げられない。

「なあに、日本にとって利用価値がなくなったって事は、ポリシェビキにとっても危険でない人間になったって事だ。警備は私の支持者たちだけで充分」

カミンスキーは、そうだろ、と言うように傍らのフレデリックを見やった。

「そうですとも」

とフレデリックは大きく頷いた。彼はそもそも、日本兵の警備を当てにしておらず、その事をボディーガードたちといつも話し合い、確認し合っていたものだ。安藤はそれを耳にする度に苦々しく思っていたものだが、今となっては、彼の方が正しかったと認めざるを得ない。

しかし、安藤にはたった一つだけ、フレデリックの方針にどうしても賛成できない点がある。

それは、ネルグイの警備の人数に加えたことだ。

正確に言えば、例の乱闘以降、ネルグイはカミンスキー邸に出入り自由になったのである。彼は自分の仕事を持っているから毎日来るというわけではなく、来たとき手伝うといった程度のことではある。

「ホラ、彼は目が良いから歩哨にもってこいだ」

などとフレデリックは言うが、ネルグイのような得体の知れない人物をボディーガードとして身近に置くのは良くないと安藤は思うのだ。

そういえば、今日はネルグイを見ていない。この頃しょっちゅう見かけていたのに珍しい事だ。

後でキャサリンを捕まえて問い質した。

「今日はネルグイはどうしました？」

「ネルグイは荷を運んでウルガ（庫倫のロシア語名、現ウランバートル）に行きました。仕事の合間に活仏を拝むのだとって楽しみにしていましたよ」

活仏（ホトクト）（高僧、多くは菩薩などの生まれ変わりといわれる）と呼ばれる人はチベット密教の流行する地域には数多くいるが、ウルガの活仏で拝む対象といえば、ボグド・エジェン・ハーンことジェプツンダンバ8世だろう。

すなわち、外蒙古の国家元首である。

中国はモンゴルの独立を認めていないから「エジェン・ハーン（皇帝）」などとは口が裂けても言わないが、モンゴル人にとっては尊い、日本人にとっての天皇のようなお方なのだ。

「ウルガ……庫倫（クーロン）ですな。活仏のいるクーロンに行ったか、労農政府のあるイルクーツクに行ったか、誰にも確かめようがないわけだ」

安藤の皮肉なもの言いに、キャサリンは怒り出した。

「どうしてあなたは、そういうひねくれた考えになるんでしょう？ いい加減にして！ もうたくさんだわ！！ そんなに心配なら、ご自分でウルガにでもイルクーツクにでも行けば良いんだわ！！！」

キャサリンはぷりぷり怒って行ってしまった。

安藤は厭味を言う気はないのだが、心配のあまりつい言い過ぎてしまう。しかし、そもそもネルグイがどうこういう以前に、嫁入り前の娘なのだから兄のフレデリックがもっとしっかり監督・指導すべきだと安藤は思い、そうフレデリックにも言った事がある。フレデリックは、「キャシーももう大人なんだから、オレがどうこう言うことじゃないだろ」と、まったく取り合わなかった。

安藤の心配は余計なお世話なのだろうか。

海を見に行った。

ネルグイはウルガから帰ってきてから、またカミンスキー邸にちょくちょく来るようになったのだが、どうも様子の変だな、とキャサリンは感じていた。

「どうかした？ ウルガで何かあった？」

と、聞くと、旅行中に例の斑の馬が死んでしまったのだという。

そうじゃないでしょ、とキャサリンは理屈でなく思った。

いや、故郷ホロンバイルからずっと一緒にやってきたあの馬が、彼にとって特別のものであったという事は知っている。だから、そのためにふと寂しくなると言うのはわかる。

しかし、そういうのじゃない。何か違う。

どことなくよそよそしくなったというか。どうもキャサリンを避けているように感じられるのだ。安藤があまりにねちねちとしつこく厭味を言うから、一歩引くようになったのだろうか。

気が塞ぐというのなら気分転換に。

何か理由があるのなら聞き出し、問題があるというのなら、一緒に解決していくために話し合おうと思い、海を見に行こうと誘ったのだ。

既に月が変わって10月に入っている。暦の上では秋とはいえすっかりすさんだ冬の雰囲気である。

海に臨む砂の丘には、砂の中から黄ばんで針のようになった細い草の葉がつんつん突き出している。

並んで砂の上に腰を下ろした。キャサリンは膝掛けを掛けて。ネルグイはこのくらいは寒いと思わないらしく、夏の頃と同じような格好をしている。

足下に広がるのは海とは言っても外海ではなく入海、アムール湾である。白茶けた向こう岸が地平線の上にぺろんと横たわっている。

淡い日の光にチラチラ揺れる波頭をながめながら、天気の話から政治の話まであれこれ話し掛ける。ネルグイからは

「ああ……」

とか、

「そうだね」

といった生返事しか返ってこない。

これでは誘い出した意味がない。キャサリンが思い切って距離を縮めようともたれ掛かっても、ネルグイは体を固くして緊張したまま。キャサリンの体重を受け止めてはいるものの、棒で支えるような感じだ。

会話の取っ掛かりが掴めないまま、思いの外早く傾いていく西日がそっくり海面に跳ね返り、目も開けられないくらいになってくる。

「……ねえ、ネルグイ。私のこと嫌いになった？」

ネルグイのあまりの上の空ぶりに、思いあまってストレートに訊いてみた。さすがにネルグイもびっくりしてキャサリンの顔をまじまじと見つめた。

「何を言い出すんだ。そんなわけないだろ」

「あなたは優しくて親切で……良い人だわ。私もあなたのそういう所が好きなのよ。でもね、ネルグイ。それだけじゃ駄目なのよ。私を愛しているなら、言葉だけでなく行動で示して」

「行動、か……」

ネルグイはその意味を噛みしめるかのように発音し、考え込むように言葉を切ってキャサリンの肩を抱き寄せた。彼の体の力は抜けており、先程までとは違いキャサリンの体重を包み込むように、柔らかく受け止めている。

「僕は怖いんだ、君を傷つけてしまうのが。僕らの生まれ育った環境はあまりにも違う。僕らの常識で許される事が君の社会で許されるのかどうかわからなくなってしまった。今回の旅行でその事を思い知らされた」

「何かあったの？」

「そういうわけではないけど……」

「『けど』？」

キャサリンは問い返したがネルグイは、何でもない、と首を横に振る。

「何でもない」というセリフはもう何度も聞いた。しかし、そんなわけはない、とキャサリンは思うのだ。『事件』という程の出来事はなかったにせよ、誰かに言われたちょっとした一言とか、ふと思い出した過去の出来事とか……。

いずれにせよ、軽々しく口に出せない程思い悩まなければならない何かがあったに違いない。

そして、それほど重要な事であるなら、なおさら自分に打ち明けて欲しい。そういう事ほど話して欲しい。

たくさんの思いを丁度良い言葉に置き換えられないもどかしさに、ネルグイの両頬を両手で捕まえてキスをした。

ネルグイは相当当惑したようで、

「アメリカの女の子は大胆だねえ……」

とつぶやいて、キャサリンの手を振り払って身を引こうとしてので、両腕を彼の後頭部に巻き付けて捉え、気の済むまで唇を重ねた。

「……そういう事は結婚してからするものだろ？」

ネルグイの分別くさいセリフに我に返ってみれば、キャサリンは彼にのし掛かり、ほとんど押し倒すところであった。

口では批判めいた事を言っていながらもされるがままのネルグイの様子は、NOではなくてYESなのだ、とキャサリンは解釈した。それでいて躊躇うさまは、まるで鎖に繋がれてその中でしか動き回れない飼犬のよう。ネルグイの行動に枠をはめているのが何なのか、彼の属する社会の掟なのか、先祖伝来のしきたりなのか……。もし、そういうものであるなら、取るに足らないものなのに、とキャサリンには思えた。

「結婚なんて制度は封建社会の残滓でしょ。そんなの関係ない」

「君は随分と『進歩的』なんだね。……そりゃまあそうか。カミンスキーの取り巻きだもんな……」

言い方は皮肉っぽかったが、彼が狼狽と言っても良い程に困り切っているのはみえみえだ。キャサリンは座り直してネルグイをしっかりと見つめて言った。

「ねえ、ネルグイ。もっとしっかり私を捕まえて。息もできないくらいに抱きしめていて。でないと私、どこかへ行っちゃうかもしれないわよ……」

しばらく目と目で見つめ合っていたが、ネルグイの方から目を反らし、膝掛けをとってキャサリンの肩を包んだ。

そして、キャサリンの髪に顔をうずめてつぶやいた。

「君は後悔するよ……」

「後悔なんてしない！ あなたを躊躇わせている困難が何なのか知らない。だけど、そんなものに負けるもんですか。何があろうと立ち向かう覚悟はできているわ」

「覚悟……覚悟か。そろそろ僕も覚悟を決めてかからなければならぬって事なんだろうな……」

彼はキャサリンの髪を指に巻き付けたり解きほぐしたりしながら、独り言のようにつぶやくのだった。

すっかり顔見知りになったボディガードの若者に挨拶をしながらネルグイが入ってきた。

「やあ、キャサリン。カミンスキーさん、いる？」

キャサリンの姿を認めるなり子犬がしっぽを振るような屈託のない笑みを浮かべて駆け寄ってくる。

「いるわよ。だって日本の官憲は外に出させてくれないのよ。会うの？ だったらルイ兄さんに一応聞いて」

キャサリンの両手を取ってうれしそうに振るネルグイにもそう言わざるを得ない。

「もう一年近くになるっていうのに、まだ僕のことを信用してないのか……」

「そうじゃないけど、皆そうなのよ。私も。そういう決まりになっているの」

「規則、規則！ わかったよ！」と、投げやりに言い、それから声を潜めてキャサリンの耳元にささやいた。

「……でも、安藤がチェックするんじゃないだけ気が楽だ」

一方、彼に言っておかなければならない事があるキャサリンは迷ったけれども切り出した。

「あの……ネルグイ……」

「んー？」

ネルグイは足を止めて振り返った。

「あのね、私……」

思い切って言おうとしたものの、

「どうしたの？」

と、何も知らずに聞き返すネルグイがロシア語の本を小脇に手挟んでいることに気づいた。

あの本は、カミンスキーが「宿題」としてネルグイに読んでおくようにと言って渡していたものだ。帝政ロシア時代に社会主義者としてシベリアに流刑になったカミンスキーが、ヨーロッパ・ロシアとは違うシベリア・極東の状況を分析して著した本である。

ネルグイがカミンスキーに用事があったのなら、そっちを優先すべきだろう。自分の用など、私事に過ぎないのだから……。

そんなことをうだうだと自分に言い訳して、キャサリンは自分の用を取り下げた。

「ううん……いいの。後にするわ」

「?? じゃあ、後で……」

ネルグイは訝しげに首を傾げていたが、フレデリックの所に行って用件を告げ、緊張した面もちで服の上からの身体検査を受けている。

ネルグイは気を引き締めるように改めて背筋を伸ばした。

深呼吸してカミンスキーの書斎に向かう。キャサリンはその背をさりげなく視界に入れて観察していた。

ネルグイはドアをノックしてからごくりと生唾を飲み込み、「レフ・ダヴィドヴィチ、僕です。入っていいですか？」と、直立不動の姿勢で尋ねた。

すぐに中からカミンスキーの返事があった。「ああ。いいよ」

その声を聞いてネルグイはノブを回し、「この前お借りした本を返しにきました。難しかったけど……とても興味深いものでした」と言いながら中に入っていった。彼が後ろ手にドアを閉める間、カミンスキーの声が聞こえていた。

「君も少しは民族自決と階級闘争の連携の重要性がわかってきたかね？ しっかり勉強することだね。焦らず、じっくりと……」

そこでドアはかたん、と音を出して閉じられた。

キャサリンはふう、と息を吐いて椅子に腰掛けた。いつ出てくるだろうか、と中の物音に聞き耳を立てながら。ネルグイがカミンスキーとの用事を終えたらこの事を話さねば……。

不意に、ズダーンと大量に水分を含んだ物によると思われる重い音が書斎の内部からした。「何だ？」

フレデリックも腰を浮かせる。

ちょっと物が落ちた、という程度ではない。

水分を大量に含んだもの……すなわち人間が倒れた音だ、とキャサリンは咄嗟に思った。カミンスキーが脳卒中でも起こしたのではないかと慌てて書斎に飛び込んだ。

真っ先にキャサリンの目に飛び込んできたのは、うつ伏せに倒れ込んで呻くカミンスキーの姿だった。後頭部の髪が血で染まっているだけでなく、バックリ裂けた傷口がはっきり見えるほどだった。

「え……何？」

全く予想していなかった血生臭い光景に、通常の思考は吹っ飛んだ。危険を避けようとする本能が、キャサリンの足を後ずらせた。

何が起こったのか理解できないままだただ動転するキャサリンの視界に、カミンスキーの傍らに立ち尽くすネルグイの姿が入ってきた。

その手に血濡れた手斧が握られている。目があった瞬間、キャサリンは状況を理解することができた。

「なぜよりによって……」

ネルグイは犬のように鼻面にしわを寄せて呟いた。

「ネルグイ……あなたは私を騙していたのね！」

キャサリンが呻くように言った瞬間に、ネルグイは手斧をキャサリンめがけて振り下ろした。

「や、やめて！」

悲鳴を上げて横に逃げたけれども避けきれない。刃こぼれした斧の刃先がキャサリンの腕をかすめて斬り下ろされた。それだけで袖の部分の着衣が裂け、肉がこそぎ落とされた。

「のこのこ入ってきたおまえが悪い」

自分の仕事をじゃまされた苛立ちだろうか、唸るようにのどの奥で言うと、今度は逃げられないようにキャサリンを壁際に追いつめて手斧を振り上げた。

「やめろ！」

小柄な影がネルグイの背後に立った。安藤だ。

高く振り上げられたネルグイの腕を掴み、軽く捻ったように見えただけ。それで易々とネルグイの体を宙に舞わせた。

ネルグイは床に叩きつけられてもうめき声一つ上げず、素早く身体を捻って腹這いになる。四つん這いのまま安藤めがけて飛びかかる。跳躍する勢いで上半身を起こし、手斧を胸元に引き寄せる。

そこにフレデリックが駆けつけてきた。

瞬時に状況を見て取ると、横からネルグイにタックルして向こう側の壁まで吹っ飛ばした。

「この人殺し野郎！」

倒れ込んだネルグイの胸や腹を蹴りあげ、踏みつける。手斧はネルグイの手からこぼれ落ちていた。

フレデリックは更に胸ぐらを掴んで体を起こし、腹部を狙って膝でガツガツと蹴り続ける。

ネルグイはぐったりしていたが、本当に動けないのか動けないフリをして隙をうかがっているのか安藤には判断できない。

それでも、フレデリックの暴行を押しとどめざるを得ない。

「やめてください。これ以上やったら本当に死んでしまう。動機が何なのか、背後に誰がいるのか、わからなくなってしまう！」

フレデリックはネルグイを掴んだまま、がばっと振り返って安藤の鼻先でがなり立てる。

「背後に誰がいるかだって？ そんなの調べるまでもないだろ！」

苛立ってネルグイを安藤に叩きつけんばかり。

「ウラジオストクにテロリストを支援する組織があるのなら、それを放っておくわけにはいかないでしょう！ どんな手段を使ってでも吐かせて組織を根絶しなければ。末端の鉄砲玉をいくら

捕まえても、第二第三のテロが繰り返されるだけです！」

それでフレデリックはようやく手を止めた。

キャサリンが書斎のドアを開けてから5分も経っていない。

物音を聞きつけたカミンスキー夫人のエヴェリーナ・カミンスカヤが駆け込んでくる。危険が取り除かれたかどうか確かめもせずに、まっすぐにカミンスキーに走り寄る。

「レフ……どうしてこんなことに……しっかりして。目を開けてちょうだい！」

膝から崩れ落ちた。抱き上げようにも後頭部の傷の致命的な深さに手をこまねくばかり。

キャサリンは痛みも感じられないほどの衝撃を受けたのか、呆然と立ち尽くしている。

しかし、相当の深手を負っているはずだ。指先から滴った血が作る血溜まりが、見る間に広がっていく。

安藤はその様子を横目に見ながら、ネルグイをフレデリックから引き離して床に腹這いにさせた。背中に乗って動きを封じ、腕を後ろに捻って押さえつける。

安藤はキャサリンのあまりの痛々しい様子にネルグイについて一言言ってしまった。

「キャサリンは君のことを信じていたんだぞ」

ネルグイは胸を圧迫されて喘ぎながらも、横顔で安藤を見やると勝ち誇ったように歯をむき出して笑った。

「……バカな女だ……」

「なんだと。ぶっ殺してやる！」

フレデリックはネルグイの髪を掴んで思いっきり頭を揺さぶった。その後靴先で容赦なく顔面を蹴りつけたのだ。

びくびくっと安藤の手の中でネルグイの手足がけいれんした。鼻が折れ、唇は避けて顔面血まみれである。それでもフレデリックは執拗に蹴りつける。ブン殴りたい気持ちは安藤だって同じだ。それでもフレデリックを制止せざるを得ない。

「もうやめてください。楽に死なせてやるのはむしろ免罪符を与えてやるようなものです。そもそもここから逃げおおせると思って犯行に及んではないいでしょうから、死を与えるって事はコイツの仕事を完成させてやるようなものです」

安藤の顔をまじまじと見つめているうちに日本軍に捕らえられた革命家がどのような目に遭っているのか思い出したのだろうか。フレデリックは舌打ちしてネルグイの頭を放り出した。ゴツ、と重い音を出して頭は床に落ちたが、ネルグイの反応はない。

「レフ……しっかりして！」

エヴェリーナの必死の呼びかけに、安藤もフレデリックも我に返った。何よりも救護活動の方が先だ。

カミンスキーはうめき声を上げ、うわごとのように答えた。

「連中のやりそうなことだ、連中の……」

まだ意識がある。希望はある、とみて、安藤はフレデリックに言った。

「フレデリック、車を！」

「わ、わかった」

フレデリックは弾かれたように走り去った。

「あなた、気をしっかり持つのよ。すぐに病院に連れて行くわ」

「わしはもう助からん。ポリシェビキはついにわしを仕止めたのだ。わしは……罨にまんまと引
っかかったわけだ。は、は……いつかはこうなるとはわかっていたよ……。わかっていた
んだ……」

ふうと長く息を吐いてカミンスキーはしゃべるのをやめた。微かに胸のあたりが上下している
から息をしているのはわかるが、それ以上彼が声を発することはなかった。

「レフ……駄目よ。しっかりして！ レフ！」

安藤はエヴェリーナが彼の耳元に声をかけるのを見守ることしかできなかった。

がらんとした空間に安藤は立ち尽くす。

全ての商品、家財一切が片づけられて人の気配のなくなった家は、住み慣れた我が家とはどうい思えなかった。こんなに狭いところによくもまああれだけ大量の物を詰め込んでいたものだと引っ越し前後の大騒ぎを思い出して安藤はあきれると同時になんとも寂しい気持ちになった。

次から次へと降りかかってくるごたごたから逃れ、感傷にどっぷりと浸り、気持ちを切り替えるつもりで来た。が、いつの間にかネルグイのことを考えていた。

この件を担当することになったのは、やはり安藤が一番彼のことを知っているから見なされたからなのだろうが、安藤自身は気まずさも感じていた。安藤が警備の任に就いていながら、結局暗殺を阻止できなかったのだから。カミンスキーは病院にかつぎ込まれたが、二日後に死去している。

当局としては、用済みのカミンスキーについてはどうでもよくて、今はネルグイをポリシェビキがどのように徴募したのかに多大な関心を寄せているのだろう。内蒙古のホロンバイルからウラジオストクに出稼ぎに来て1年かそこらのモンゴル人のどの辺の琴線に触れて死をも厭わない暗殺者に仕立て上げたのか。その手口を知りたいというわけだ。ホロンバイルばかりでなく、日本軍の駐屯している地域にもモンゴル系の人々はたくさんいるから、彼らがポリシェビキ側に立つのを防ぎ、できれば親日的な心情を植え付けるにはどうしたらいいのかを探ろうというのだ。

だが、安藤は、そういう手のひらを返すような露骨な態度に違和感……むしろ嫌悪感を感じずにはいられない。

この家はもう誰も訪れることもないと思って気が緩んでいた。全く思いがけず空き家のドアがノックされている事に安藤は気づかなかった。

「安藤君……」

声をかけられて安藤は驚いて戸口を振り返った。

「あ……先生」

安藤の柔道の先生である石黒真琴であった。

「君が来ていると聞いてね」

相変わらずの地獄耳。安藤はちょっと元の自宅に立ち寄ってみただけなのだ。事前にどこに行くとも誰にも告げていないのだが。

「こんな状況なので、お茶も出せませんが……」

「いや、お構いなく。帰国の挨拶にと思って。君に黙って帰るのも申し訳なくて……一言謝りたいと思ってね」

「謝るだなんて。今の僕があるのは先生のおかげなんです」

そうなのだ。

安藤をこの世界に引き入れたのは石黒なのだ。

石黒は柔道家として日本人の移り住んでいる所にはどこにでも出かけて行って子供たちに柔道を教え、現地の人たちにも普及をしている。小柄な石黒がぼんぼんとロシアの大男を投げ飛ばす様は強い印象を与え、彼の教えを請おうとやってくる人たちは後を絶たない。その傍らで、彼は地道に各地の生の人々の声を収集しているのだ。ただし、石黒はロシア語が話せないから、安藤のようにロシア語が堪能な人間の助けを常に必要としている。

安藤もまだまだ子供と言っていい頃からそれと気づかずに石黒に協力してきた。何と言っても、安藤は石黒を柔道の師として尊敬していたので、彼の助けになれることならと、自分から進んで力を貸したのだ。

その石黒が帰国とは。まさに寝耳に水。日本軍が本格的にシベリア・極東各地に展開した今こそ、石黒の活躍の時ではないのだろうか。

「日本にお帰りになるんですか？ いつですか？」

「明日の敦賀便で帰国する」

「ええ？ それは随分と急ですね……」

畳みかけるような思いも寄らない話の連続に、安藤は次ぐ言葉がなかなか見つけられなかった。

「いや、召還されたんだよ。……革命が極東ロシアに与える影響について分析した報告書を提出したんだが、それを『ロシアの運命はロシア人自身が決めるべき』と締めくくったところが、それが上層部の気に食わなかったらしいな」

石黒は自嘲的な笑みを見せた。

「いや、それはおかしいでしょう。至極真っ当な結論です。なのになぜ……」

石黒は決して労農政府に対して好意的ではない。むしろ、共産主義を危険な思想と捉え、それが極東・シベリアに蔓延することに危機感を持ち、早くから警鐘を鳴らしてきた。ボリシェビキの活動家が拘束された時も、断固たる措置を執るよう……つまり、処刑するよう助言した。

長年ロシアばかりでなく中国まで足で回り、現地の人たちと友達になったり喧嘩したりして腹を割って話し、酒を酌み交わす一方、広い視野で北東アジアの情勢を観察している石黒の分析に、役所から一步も出ずに新聞から情報を拾うだけの内地の人間がなぜ難癖を付ける事ができるのか。

「まあ、要するに結論ありきななのさ。上層部の誰なのか、役人なのか政治家なのかは知らんがね、自分に都合の良い報告をした者が正しい分析のできる者というわけさ。客観的な真実のロシアの有様なんて、誰も興味がないのさ」

「……」

ネルグイの扱いの件でもやもやした物を感じていた安藤は、石黒の話に同じ匂いを嗅ぎ取って

漠然とした不安を感じた。

そして、これが母の言っていた「女の勘」というヤツか、と思った。

「ところで、安藤君……」

と、石黒はそれまでの皮肉な物言いからがらっと変え、歯切れの良い口調で言った。

「……チタの日本軍にオレーク・レオーノフというコミンテルンの活動家が投降してきてね。まあ、コミンテルンに所属しているっていうのは表向きなんだろうがね、その尋問にロシア語に堪能でロシア人の心の機微のわかる人間が必要だと言っていたので、君を推薦しておいたよ」

「チタの日本軍……それは陸軍の案件でしょう？ 僕が出て行ったら良い顔をされないのではないのでしょうか」

ただでさえネルグイの案件を抱えているのにまたそんな難題を……と石黒には言えなかった。そういったことを直接関わっていない人間に迂闊に話すものではないからだ。そういう慎重さを欠く行為は自分の命に関わる事があるばかりか、相手にとっても良い結果をもたらさないものだ。

「安藤君、君まで役所の縄張り意識に染まったか！」

石黒は安藤の肩を掴んでカラカラと笑った。

「そんなものは気にするな！ 行きがかり上、海軍に所属する事になったが、そんなものは表向きの話だ！」

安藤の目を見て心配するな、と頷いてみせる。

それはそうなのかもしれないが、と安藤はふと思った。

石黒のそういう自由で既成の枠に囚われない発想が、そもそも軍とか役所とかいったもののあり方とそりが合わないのではないだろうか。ウラジオストクに限らずシベリア・ロシア極東に自ら入り込んでいった日本人は、そういう自由な気風、未知の世界を切り開いていく際にどうしても必要となる柔軟さを持っていた。

しかし、はじめ海軍陸戦隊が、続いて陸軍が駐屯して軍隊の組織が形作られていくにつれ、全てに内地と同じ枠がはめられ、全てが不確定なこの地の特性を無視した硬直した体制が構築されつつある。その変化を敏感に嗅ぎ取って、ウラジオストク古参の日本人たちは次々とこの地を去ろうとしている。

石黒は自主的にこの地を去るわけではなく召還されたわけだが、そういった傾向を象徴しているように安藤には思えた。

「どうしました？」

声を掛けられて我に返った。

安藤ははっとして手を開いた。ネルグイの胸ぐらを思わずつかんでしまっていた。

怒りで頭に血が上り、周囲の音が聞こえなかったのだ。

ネルグイの看護人兼監視役の衛兵が病室の鍵を開けた時に大きな音がしたはずなのだが。

ネルグイの顔には大きな絆創膏が張り付けられており、そうでないところも青紫に変色してまだ幾分腫れている。更に病院にかつぎ込まれてからわかったことだが、肋骨も折れていた。

彼は医者 of 言うことには極めて従順で何でも言われたとおりにするし、一日中安静に寝て過ごしている。

だが、安藤には素直で大人しい患者を装っている、としか思えないのである。

安藤は、まずはネルグイの言い分を聞こう、という姿勢でいた。

一人の命を奪うにはそれなりの理由がないはずがない。だが、ネルグイは時に冷ややかな笑みを浮かべて安藤の話聞くだけ。

その表情が安藤を馬鹿にしているようにも憐れんでいるようにも見えて、なんとも腹立たしい。

たとえ主義主張のためだとはいえ、一年近く親しく交際した人を易々と手にかけるとは、どういう神経をしているのか。特にキャサリンに躊躇なく襲い掛かったことは、理解の範囲を超えている。

だからつい、

「……彼女、流産したんだぞ。かわいそうだとは思わないのか？」

と、感情的になじってしまったのだ。ネルグイはこれに対しても、

「オレには関係ないだろ」

と冷淡に言い放った。

その言葉を聞いて安藤の頭には一気に血が上った。

「関係ないとは何だ？ おまえの子供だぞ？ おまえが彼女に大けがを負わせたからそのショックで流産したんだ！」

思わず怒鳴りつけた。

「関係ないだろうが。彼女の方から誘ってきたんだぜ？ 後のことなどオレが知るか」

嘲笑うかのような挑発的な口調に、安藤は思わず胸ぐらをつかんでネルグイを病床から引きずり起こしていた。

「貴様には、人の情というものがないのか！」

この安藤の剣幕に椅子が弾き飛ばされて大きな音をたてた。そのため、外で待機していた衛兵が鍵を開けて入って来たのだ。

「大丈夫ですか？」

衛兵はひっくり返った椅子を立て、安藤の背に手をかけた。

「ああ……。大丈夫……」

安藤は居住まいと呼吸を整えながらも、ネルグイをにらみつけた。

「殴ればいいのに。抵抗できない怪我人を痛めつけて自白を引き出すのがおまえらのやり方なんだろ？」

ネルグイがざらついた声で言った。

「貴様が暴力云々を言えた義理か！」

安藤はどうにも腹の虫が収まらず、苛々と病室を歩き回った。

「往生際の悪い奴ですねえ」

衛兵の方はロシア語がわからないから、ネルグイが安藤に叱られても口を尖らせて屁理屈をこねている子供のように見えたのか、あきれて鼻で笑っている。日本人なら「生きて虜囚の辱めを受けず」と捕まった時点で自決を考えるのかもしれない。だからこうしておめおめと囚われの身になっている時点で軽侮の対象なのだろうが、それは価値観の違いに過ぎない。臥薪嘗胆、どんな辱めを受けようと、奴隷の身分に墮とされようと、なんとしても生き残って再起を図り、目的を達成しようとするのが彼らの矜持なのだ。

「気をつけろ。チョロいやツと思わせて隙をうかがっているのだから。決して甘く見てはいけない」

「はい」

と、衛兵を注意したものの、平静さを乱された安藤だって同じこと。このまま続けたら安藤自身が彼の術中にはまるような気がした。頭を冷やして冷静に対処した方がよさそうだ。

そこで気分転換に銭湯に行ってみることにした。

ウラジオストク市内にはロシア式の蒸し風呂・バーニャも幾つかある。しかし、ここは日本式の湯屋に行って湯船につかりたい。

日の最も長い時期だから外はまだ明るい。辻馬車を拾って繁華街にでる。仕事を終えた建築労働者、港湾労働者、あるいは「レインボー・パトロール」などと呼ばれる様々な国の兵隊たちで賑わっている。夜は到底出歩けるような治安でないウラジオストクであるが、そういうところも含め、有り余るエネルギーが自身の力をもてあましてのたうっている、そんな狂暴なまでの生命力をたたえた町の雰囲気が好きだ。

通りすがりの人に絡んで連れにたしなめられる酔っ払い。つるんで市内見物をしている日本の兵隊たちにしきりに声を掛けている夜の蝶たち等々。横目で見ながら行くうちに、安藤はだんだんと客観的にネルグイのことを考えることができるようになってきた。

あれは本心を悟られないようにする強がりにすぎないのかもしれない……。

今までは何を訊いてもせせら笑って答えなかったネルグイが自分のことを語ったのだ。心を波立たせる何物かがあったのだろう。いくら理詰めで自分を正当化しても、人の命を奪うことに後ろめたさが残っているのかもしれない。言い換えると、これが彼にとっての戦争だとして人を殺すことが許されるのだとしても、戦争にだって法がある。彼の法に触れる何事かがあったのかもしれない。それがわかれば、彼の心を開かせることができるのではないだろうか。

安藤はいつものように衛兵に病室の鍵を開けてもらって中に入った。

ネルグイは少々うんざりした様子で安藤を一瞥しただけだったが、安藤に手招きされて日に焼けた老人が裸足ですたすた入って来た時には明らかに眉を顰めた。

「こういうことは、本当は駄目なんだがね……」と、安藤はネルグイに言った。「……君らの言葉で何でも話すと良い。保安上、僕も同席するけど、僕は君らの言葉はわからない。好きにおしゃべりすると良い」

「ラマ（チベット密教の僧に対する尊称）だろうがなんだろうが、どうせおまえらの手先なんだろう？」

ネルグイは安藤をにらみつけてうめくように言った。

「さあ、それはどうだろう？ もちろん、後で君と何を話したかは尋ねるがね。彼がバルグート出身のラマであることは間違いない。故郷のことも、死後の世界のことも気軽に尋ねてみてはどうか？」

仏僧をネルグイに会わせてみようと思いついたのは、湯屋に行って気持ちの整理をしていたときのことだ。

安藤が湯船に浸かって半分のぼせながらあれこれ考えていると、身体を洗っている旅館か料理屋の女中の話しが断片的に耳に入ってきた。日本国内と同様、ウラジオストクの日本式湯屋は混浴であるので、近くに安藤のような若い男が居ても特に気にせず、あれこれの世間話をしていた。

。

「……〇〇（聞き取れず）ちゃんの方はお盆は里帰りできそう？」

「無理じゃないかな。日本はお盆でもロシアはお休みじゃないもん。本願寺さんに行ってお参りするくらい……」

そういえば以前、ウラジオストク本願寺（正確には布教場）の法会で、内蒙古からご本尊を拝みに来るラマもいるんですよ、なんて話を聞いたことがあったなあ、と安藤もぼんやりと思い出した。

黄色い法衣のチベット密教のラマと墨衣の日本仏教の僧は、一見すると全然違って見えるが、仏教という点では同じなんですねー、なんて皆で言い合ったものだ。

たとえ今の主義主張が宗教を否定するものであっても、モンゴル人であれば子供の頃には仏教の環境で育っているはずだ。それに対して懐かしさを感じるか、憎しみを感じるかはわからない。しかし、心になんらかの動きを生じさせるに違いない。巡礼のラマが今もウラジオストク周辺にいるのなら、ネルグイにちょっと会わせてみるのも良いかもしれない……。

ただ、内蒙古といってもおそろしく広い。モンゴルといっても様々な部族がある。その中で「バルガのラマ」と限定して探すのは苦労した。それでも、いろいろなつてを手繰りに手繰ってロシア極東を行脚していた老ラマを探し出すことができた。

安藤は病室の隅に椅子を置いて座る。

ネルグイはむっとした様子で安藤をにらみつめている。

ラマは簡単にオンマニパメフムとチベット密教式の念仏を唱えてから、いきなり身を乗り出して、傷跡のくっきり残るネルグイの鼻先にまで顔を近づけ、目をのぞき込んで話しかける。ネルグイがどんな人物であるのかは、安藤が知る限りのことは教えてある。彼は異境で偶々会うことになった同胞を単純に心配しているようだ。話している内容はわからないが、ネルグイが寝返りを打って目をそらせても、寝台に寄りかかるようにして上から話しかける。

ネルグイが無視し続けてもラマは根気強く話し続けるので、遂に苛立たしげに彼の顔を手で押しやり、

「オレは坊主と話す事なんかないぞ！」

ロシア語で安藤に向かって訴えた。

「君は生死の狭間にいるんだぞ。最終的に日本の裁判所が裁くのか、ロシアの裁判所が裁くことになるのか、まだ何とも言えないが、いずれにせよ最悪極刑になることだってあるだろうから、気持ちの整理をしておいたらどうか。もっとも、コミュニストは神仏には祈らないか」
今まで余裕綽々だったヤツが遂に音を上げたか、と内心胸をなで下ろした。

「うるさい。オレはおまえ等なんかに殺されない！」

ネルグイは拗ねた子供のようにそっぽを向いて黙りを決め込む。

そのまま数時間。ラマの方は何やら物語ったり、お経を唱えたりしていたが最後には根負けして、帰る、と身振りで安藤に告げた。

結局、ネルグイはラマと一言もしゃべらなかつたな、と安藤はラマと一緒に部屋を出ながら思った。

老ラマを紹介してくれた人の話によると、同じモンゴルといっても、やはりお国訛りのようなものがあるのだそう（彼は老ラマとはチベット語でしゃべっていた）。こういう異境にいてお国の訛りを聞けば懐かしくなって、ついつい心を許してしまいそうなものだがな、と不思議に思うと同時にピンと来るものがあつた。何の確証もないから空振りに終わるかもしれないが、チタに行ってみよう、と思ひ立った。思い過ごしで済ましてしまうには、何とも言えないもやもやが幾つもありすぎる。

列車がウラジオストクの駅舎に停止すると、走っている時には清々しいと感じられた潮のにおいが、「磯臭い」とかえって悪臭に感じられてきた。駅前の広場からだろうか、馬糞の臭いの混じった埃っぽい熱風が吹いてくると更に酷い有様になるが、大荷物を降ろしたり、出迎えの人と抱擁したり、迷子になった連れを捜したりと大騒ぎの乗客は、そんなものを気にしている暇はない。

安藤も多少ある荷物をなくすまいと両手で抱えて、大混雑のホームから駅舎を出ようと必死だった。ウラジオストクと、ハルビン、チタ、さらにはイルクーツクを結ぶ東清鉄道、毎日ちゃんと動いているとは言ってもダイヤなどないに等しく、一日に3時間、4時間遅れるのはザラ。列車での往復だけで10日以上かかり、チタでの調査も含めて一か月近く費やしてしまった。それでも、それに見合うだけの収穫があった。少しでも早くその成果を活用したいと思うと自分の進路上にいるほかの旅客が障害物競走のハードルか何かのように見えてきて、皆蹴飛ばして走りたくなってくる。

そうして一人で気ばかり焦っているところへ、思いがけない人物が駆け寄ってきた。

「安藤さん！」

一瞬、光が射して人々が身を引き道をあけたかのようにだった。人混みをかき分けるような素振りもなくすると近づいてきたのはキャサリンだった。

「チエールさん……お体に……障りますよ？」

厚手のプラトークを腕に巻いて羽織っているものの、その下はワンピース。更にその下は素足にヒールのある靴を履いていて、ちょっと開放的すぎるんじゃないかとどきりとした。キャサリンはそんなことには構わずに、

「安藤さん、お願いがあります。ネルグイに会わせてください！」

と、いきなり安藤の腕をつかんで言った。

安藤は表情を固くした。

「それはできません」

チタに用事で行くことは、出発前にフレデリックに会ったから彼から聞いたのだろうが、列車なんていつ到着するかわからないのに、ずっと待っていたのだろうか。そもそも、今日帰着するとは限らないではないか。

「なぜです？ どんな凶悪犯だって面会したいという人がいれば会えるでしょう？ 日本の法律ではそんな基本的な人権も保障されていないんですか！」

「誰でも会えるというわけではありませんよ。……なんのために会うんです？」

「会って彼の本心を聞きたいんです！」

「本心ね……」

できることなら安藤だって聞いてみたい。が、そんなことを簡単に話すようなヤツではないではないか。特にチタでの調査を終えて帰ってきた今ではそう確信している。

「私が訊けば、きっと本当のことを話してくれるはずですよ！　きっと何かどうしようもない理由があったに違いありません！」

プラトクの下からちらりと包帯がのぞいている。一つ間違えば命を落としていた。いや、向こうは明らかに命を取る気でいた。にもかかわらず、まだネルグイを信じようとしているのか。安藤はその心情がよく理解できず、なんて分からず屋なんだ、と苛々してきた。

「……言っちゃああなたが、彼が今更あなたに真実を話すとは思えません。もう彼の事は忘れなさい。終わってしまったことは仕方のないことです」

「あなたにあの人の何がわかるんです？」

キャサリンが感情的に詰問してきたので、安藤も容赦なく論破してやらなければならないような気分になってしまった。

「いや、まったくもって理解できませんよ。でも、あなたにもわかっていないでしょ？　彼はあなたに自分の本名さえ告げていなかったんだから」

「え？」

キャサリンは凍り付いたが、安藤は畳みかけるように続ける。

「ネルグイというのはモンゴルの言葉で『名無し』という意味なんだそうです。仲間内の通り名なんでしょうけど、それをそのままここでも使っていたんですね。彼の言ったことは名前も経歴も全て偽りだったんです」

キャサリンは力なく安藤を離し、言う言葉も失って呆然と立ち尽くす。

安藤はネルグイの事をキャサリンに教えるつもりはなかったのだ。

いずれこの件が落ち着いてから、フレデリックに事情を話さなければならないかな、と漠然と考えていただけだ。そうすれば、キャサリンの様子を見てフレデリックが話してくれるだろう、と。

今はそっちの方に気配りをしている心の余裕はなかった。チタでオレーク・レオーノフを尋問し、帝政時代のロシアの警察の記録を調べて、大まかな輪郭はつかんだと思うが、これからネルグイ本人に尋問しなければならないし、あれもこれも裏をとらなければ……と、意気込みばかりが先走り時刻表にない長時間停車をじりじり待ってようやく到着したところだったのだ。キャサリンにどこまで話すのか……そもそも話していいのか……安藤は何一つ考えていなかった。

そんなデリケートな話を売り言葉に買い言葉で言っけし、言っけしまつてから、しまつた、と思つた。言うべきではなかつたのかもしれなない。

このまま放つて置いては危ないと思つた安藤は、キャサリンの肘の所をつかんで駅舎の外に出た。辻馬車をつかまえ、キャサリンを押し込むようにして馬車に乗り、カミンスキーの隠れ家だつた邸宅の方向を指示した。

「……カミンスキーさんが死んでしまつたのは、私のせいなんだ……」

石畳をかむ騒々しい車輪の音の中でキャサリンは涙ぐむ。

「そんなことはありませんよ……」

安藤は、キャサリンの弱気な様子にすっかり動転してしまった。

「……私が不用意に信用したから……」

「仕方のないことです。向こうは端から騙そうと思って用意周到で近づいてきているのですから」

「でも、私はカミンスキーさんを守る立場だったのだから、もっと気をつけていなければいけなかったんだ……」

「一度目を付けられたら逃れられない……そういう質（たち）の悪い連中を敵に回してしまった事がカミンスキー氏の運の尽きだったんですよ。運命なんです。あなたが悔やんでもしょうがない」

安藤は振動と騒音に負けないように声を張り上げ、努めて強い口調で言った。

いったいどうしたらいいのか。話さなければよかった、といってももう遅い。かといって、ネルグイのことを盲目的に信じ続けて、変なことをされても困る。真実を包み隠さず知らせた方がよいのだろうか？ 自分が真実を全て知っているというわけでもないのだけれど。

要するに、チタの日本軍に投降したオレーク・レオーノフから聴取した話ではそうだというだけのこと。レオーノフは自分は極東ロシアでの破壊工作すべてを指揮していたと吹いていたが、それはおそらく自分を大物に見せかけようとするホラで、せいぜい幾つかの作戦を受け持っていたに過ぎない。それでも、レオーノフは自分の知っている限りの事実を話している、という心証を安藤は持った。特にネルグイと呼ばれる暗殺者をウラジオストクに送り込んだのは彼だと点では。根ほり葉ほり聞いてみてことごとく符合するから間違いなからう。

それでも、それは真実の一面でしかない。

迷った末に、どんなに不愉快な真実でも知っておいた方がよい、知った上で彼女自身が判断すべきことだ、と意を決した。今までさんざん偽りに傷つけられた彼女に、たとえ方便であっても嘘でその場を取り繕うような事を言うのはよくないのではないかと思ったのだ。安藤はキャサリンの手を取った。彼女は目を伏せていたが、その睫の下の瞳を見て、言葉を一つ一つ選びながら言った。

「彼は……本名はソヨルというイルクーツク生まれのブリヤート人だそうだが、今回が初めてじゃない、非情な手段で何人も殺してきている職業的な暗殺者だ。ポリシェビキに騙されたり、脅されたりして利用されているわけではない。彼自身がポリシェビキかどうかはわからないが、組織に命令されれば忠実に実行する、人の心のない傀儡（くぐつ）のようなものだ。……人のカタチをしていれば、情の移ってしまうことは普通の人ならば仕方のないことだよ。そういう君の優しい心を利用した者こそ罰せられるべきだ」

「じゃあ、私はどうしたいいの？ 私がカミンスキーさんを殺してしまった……私が軽率だったから、あの人を死なせてしまったんだ……」

「キャサリン、なぜ自分ばかりで罪をひっかぶろうとする？ 相手は人の心を食べ物にする詐欺

師の集団だ。どんなに注意しても揺さぶりを掛けて無理にでも付け入る隙を作って入り込んでくる。防ぎようがない。君が気を抜いていたってことにはならないよ。君には何も落ち度はない。何も悪くはないよ。むしろ被害者だ」

「でも、私、もう何も信じられない……。何を信じたらいいの？ だって私、本当に、本気で、愛していたんです……私……」

その後は言葉にならず、安藤の膝に突っ伏して泣き崩れてしまった。

「キャサリン……」

安藤は猫の毛のように細くて柔い髪をなで、更に言い聞かせようとしたが、こういう時には何を言うべきなのだろうか。

開け放たれた窓から外を見ていたエヴェリーナ・カミンスカヤがほらほら、とキャサリンに声を掛けてきた。

「馬よ、馬」

見れば森の縁で一頭の大きな黒い馬が短く切られた尾を棍棒のようにぶんぶん振りながら草を食んでいた。

「野生の馬かしら？」

エヴェリーナは声を潜めてキャサリンに言った。

「まさか……どこかから逃げてきたんじゃないですか？」

尾からして人の手が加わっているし、中央アジアの大草原じゃあるまいし、こんな所に野生馬なんかいるはずがない。手綱や轡が見えるはず、と目を懲らすが、馬が黒い上に陰になってよくわからない。

「ちょっと見てきます」

「あら、噛みつかれたり蹴られたりしたら大変だから放っておけばいいわ」

「脅かさないようにそっと見るだけですから……」

と、言って玄関に向かった。

ドアをあけた瞬間。

がっと片手で喉を掴まれた。声を出せないまま、家の中に押し戻される。

「……久しぶりだな」

耳で囁かれて、身体の芯から震えがきた。ネルグイだ。

助けを呼ぼうとしてもどうしても声にならない。下半身の力が抜け、膝や踵をまっすぐ支えていられない。心ならずもネルグイの胸にしっかり抱き止められる形になってしまった。

「ほらほら、ちゃんと立って歩きなさい」

微かに笑っているようだ。子供に言い聞かせるような口調で言う。

そして喉頸を手荒く掴んだまま、部屋の中に入り込んだ。

「カーチャ……？」

中にいたエヴェリーナが妙に思って聞きかけ、ネルグイと目があって口をつぐんだ。

「そうそう。大人しくしてな。そうすればそのうちに出て行くからな」

と言いきなりキャサリンの胸元に手を差し込んできた。

「……！」

あまりに強く喉を圧迫されていたせいか、悲鳴どころか音声そのものが出ない。

「何をするんです！ だ、誰か！」

金切り声をあげたのはエヴェリーナの方だった。

「残念。どんなに泣き叫んでも助けはこないよ。庭にいた連中は片づけといたから」
ネルグイはぱっぱと手を叩いて言った。

「何しにきたのよ、あなた！ 意趣返し?!」

「あんたらに恨みはないが……」

「当たり前でしょ！ 恨みがあるのはこっちの方よ！」

「……裏切り者のレオーノフをぶっ殺してやらん事には気が済まない。その前にちょっと憂さ晴らしを、な……」

とエヴェリーナと言い合いをしつつ、片手でキャサリンの体を上から下までまさぐる。

「何をやるの！ 今すぐ止めなさい！ 酷い人だわ。どれだけカーチャを辱めれば気が済むの！」

「不用心だな。何の武器も持ってないのか？」

ネルグイはキャサリンの顔をじろじろ見ながら言ってから、エヴェリーナには熊のような平手を喰らわせた。

「あぐ……」

顎のあたりを激しく叩かれたエヴェリーナは後ろによろめきながら尻から床に落ちた。それで止まらずにひっくり返って壁に頭を打ち付けた。うめき声を上げてぐったりしているにも拘わらず、足音を荒らげて詰め寄ろうとするネルグイにキャサリンは懸命にしがみついた。

「や……止めてください……エーヴァさんに乱暴しないで。私はどうなっても良いから……」
ようやく声が出た。

「『私はどうなっても良いから』だと！ こりゃまたご立派な自己犠牲で！」

直りきっていない傷の上をわざと掴んで抱き寄せた。

「……ご褒美にいい気持ちにさせてやろうか？」

ぎょっとして逃げようとするキャサリンの首根っこを掴まえて力づくで唇を甘噛みしてきた。舐めたり吸ったりといいように弄んでからようやく離れた。

「泣くな。大人しくしていれば優しくしてやるから」

知らず知らずのうちに涙がにじんでいたのだ。キャサリンは震える声で言った。

「そうしたら、自首してくれますか？」

「はあ？ 自首だって？ するわけないだろ。馬鹿か」

呆れたというより少々むっとしてキャサリンを乱暴に床に座らす。突き飛ばしたも同然の勢いだったので、キャサリンは床に倒れ込んだ。怪我をしているような腕をついてしまい、激痛のために支えきれずに横倒しになった。それでも、ネルグイを見上げて訴えた。

「これ以上罪を重ねるのは止めてください。お願い」

「黙れ」

ネルグイは険しい表情で屈み込み、キャサリンの顎をしゃくって言った。

「……正義の味方気取りでオレにお説教か？ つくづくアメリカ人って奴は……」

と言いつけ、ぱっと体をかわした。

「カーチャから離れなさい！」

エヴェリーナが料理に使う小型ナイフを両手で握りしめてネルグイに切りかかったのだ。ネルグイは避ける動作で彼女の手首を捻り、ナイフを取り落とさせた。

「黙っていれば残り少ない人生を静かに生きられたものを」

足下に落ちたナイフを蹴飛ばして遠くにやると、エヴェリーナの襟首を掴んで引きずり倒した。

「あなたのようなケダモノを野放しにして生き延びるくらいなら、戦って死ぬわよ！」

エヴェリーナは悲鳴のように叫んで拳を握りしめて無茶苦茶に振り回した。

「そうかい……じゃあ名誉の戦死を遂げな」

ネルグイはエヴェリーナをはり倒して床に押さえつけると馬乗りになった。一瞬腰を落としてため息を吐くと、次の瞬間には体重をかけて首を絞め始めた。

キャサリンは急いで周囲を見回した。水の入ったガラス瓶がテーブルの上にあるのが目に入った。

カミンスキーを死なせてしまったのは自分なのだ。その責任をとらなければ……。

その思いが体を突き動かした。エヴェリーナが床を蹴ってあがく様子を見て、理性的な思考は完全に飛んでいた。思考が飛んだことで無意識に体を守っていたリミッタが外れたのである。飛び起きる事ができたのは、痛みが完全に消え失せていたからだ。

瓶を掴んでその重さのままに大きく振り回した。

側頭部を打ち付けられてネルグイはエヴェリーナの上から転がり落ちた。彼の頭めがけて瓶を打ち下ろしたが当たらず、瓶は水を跳ね上げてばらばらに砕け散った。

ネルグイは倒れ込んだまま動かず、耳鳴りが邪魔してキャサリンには自分の鼓動音しか聞こえない。

やがて、エヴェリーナのせき込む声が耳に入ってきた。と同時に自分が驚くほど荒い息づかいをしているのに気付いた。驚きながらも、エヴェリーナが何とか無事である事がわかり、

「エーヴァさん！」

と、真っ先に彼女に駆け寄った。

「ああ……ああ……」

エヴェリーナはキャサリンと手を取り合い、それからキャサリンの背後を見て涙ぐんだ。

「……ごめんなさい、カーチャ。私たちのためにあなたは……」

キャサリンには、彼女の言っている意味がわからなかった。が、エヴェリーナのしている方向をおそるおそる見やると、ネルグイが向こうを向いて倒れていた。生きているのか死んでいるのかはわからない。ただ、ぴくりとも動かない。

しばらく呆然と眺めていたが、もし生きていて息を吹き返したらまずいと思い当たった。

後ろからそろそろと頸動脈に触れると鼓動が感じられる。遠目では呼吸をしているのかどうかよくわからなかったが、微かに息はしているようだ。

「……死んだの？」

エヴェリーナがこわごわとキャサリンの背後に来て尋ねる。

「いえ。息はあるようです。今のうちに縛っておかないと……」

「そうね。何か縛るものを捜してくるわ」

と、エヴェリーナは部屋を出て行った。

実はこの時、キャサリンは妙なことに気付いていた。

ネルグイの服の腹の辺りに少し染みができている。血のように見えるが、今当たったのは頭の辺のはず。ガラス片が飛んだにしても、その程度で皮膚が切れるものなのだろうか。

キャサリンはネルグイの体をひっくり返して服をめくりあげた。すると、シーツか何かを裂いた布で腹部を固く巻いていたのである。それでも押さえきれない血が外の服までにじみ出ていた。

「何……これ……」

結構大量な出血なのではないだろうか。キャサリンは布をほどいてみたが内側に行くほど広範な染みで、すべてをはがした後には銃創と思われる傷口が現れた。そしてその傷口は塞がっていない。

家の外でカミンスキーのボディーガード達とやり合ったときの怪我だろうか。いや、それでは辻褃が合わない。銃声などしなかったし、ネルグイは外から入って来た。布を裂いて手当するプロセスが入る余地などなかったはず。

では、日本軍から逃がれてきたときに撃たれたのだろうか。

「うう……」

傷が空気にさらされた痛みのためか、ネルグイがうめき声を上げて微かに目を開けた。

「……ばれたか」

そして、傷のあたりに力なく手を当てて目をつぶった。

「これ……どうしたの？　こんなのであんなに動いたら死んじゃう……よ？」

「オレを殺す気だっただろ？　じゃあ、いいじゃないか……」

微かに笑ったように見えた。声は非常に聞き取りにくい。キャサリンはしゃがみ込んでネルグイの耳元に、

「そもそもここに何しにきたのよ、あなた」

と言ってから唇の動きを間近で見つめた。

「……何だろうね。オレにもよくわからない」

自分の行動に対してよくわからないってなんなのだ。キャサリンは腹が立ってネルグイを問いつめようとした。

「ごまかさないで。本当は目的があるんでしょ？　あなたのように計算ずくの人が目的もなしに死の危険を冒して来るはずない。また適当なことを言って私を騙そうというの？　本当のことを正直に話たら傷の手当してあげる」

「……いいよ、もう」

「いって何？　ちゃんと説明しなさい」

「……」

何か言ったが、声になっていない。

「あなた、しっかりしなさい。まだ私の問いに答えてないでしょ！」
と揺さぶってもぐったりしている。と、ふいにさっきの口の形から、ネルグイが何を言っていたのかキャサリンにはわかってしまった。

「ごめんね」と言ったのだ。

「今更そんなこと言わないでよ……今更……」

キャサリンはネルグイの肩をつかんでそっと揺さぶった。だがもうネルグイが答えることはなかった。

キャサリンは呆然と手を離し、ネルグイの体を見下ろした。もう息をしている様子はないし、何よりも生命体の持つ生きようとする力が感じられない。ただの物体だ。

動揺したキャサリンは発作的にネルグイの服をぎゅうと掴み、激しく揺さぶった。

「やっぱり、私にはあなたを憎むことはできないわ……。しっかりして。いやよ、死なないで！」

エヴェリーナが先走ってドアを連打し、

「カーチャ、大丈夫？」

と呼びかけるのを安藤は慌てて押し止めた。それから拳銃を構えてドアを開ける。

カミンスキーのボディガードだった若者が、ネルグイに襲われた後、怪我をしながらも助けを求めに行ったため、ネルグイがここにいることが知れた。駆けつけた安藤はエヴェリーナと出くわし、彼女の案内で中に入ることになったのだ。

ドアを開けるなり安藤の目に飛び込んできたのは、ナイフを持って己の喉を突こうとするキャサリンの姿だった。

「馬鹿なことはよせ！」

安藤が躍り掛かってキャサリンの細い腕を掴むと、指をこじ開けて握っていたナイフを取り上げた。キャサリンはそのまま泣き崩れた。

「どうして止めたの、安藤さん。私はもう生きていたって仕方がない……疲れたのよ……」

傍らに横たわるネルグイを視界に入れながら、安藤はキャサリンの背に手を置き、

「馬鹿な……。君が死ねば悲しむ人だっている。君の兄さんだけじゃない。彼のために君が傷つく必要はないんだよ。彼は今日だって残忍な手段で衛兵を殺して脱走しているんだ。そういう奴なんだ。君が騙されたからってそれが君のせいだとは言えないよ。相手が悪すぎたんだ。気にしちゃいけない。カミンスキー氏を守りきれなかった僕の方が責められるべきだよ」

しかし、キャサリンは弱々しく首を振るのだった。

「そうじゃないのよ、安藤さん……。違うのよ……違うの……」